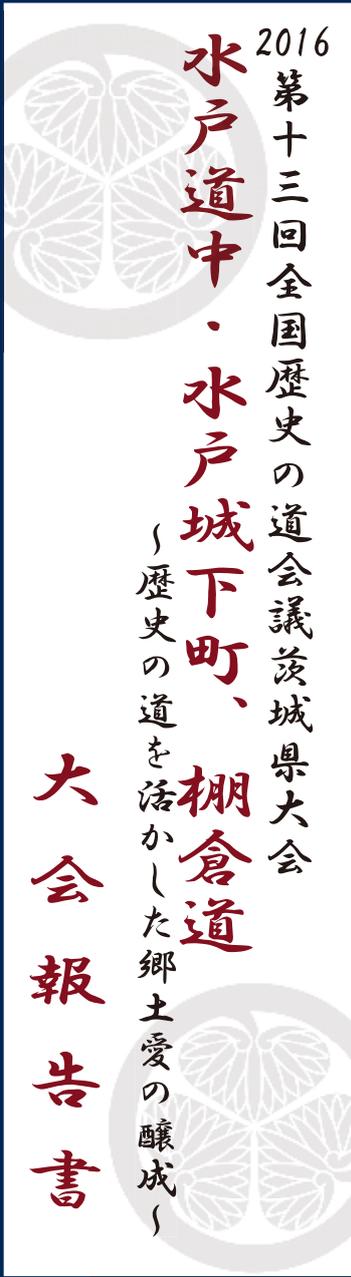


2016 第十三回全国歴史の道会議茨城県大会

水戸道中・水戸城下町、棚倉道

（歴史の道を活かした郷土愛の醸成）

大会報告書



講演会

11月19日（土）

13:00～16:40

会場

茨城県立県民文化センター

小ホール

（水戸市千波町）

歴史の道ウォーキング

11月20日（日）

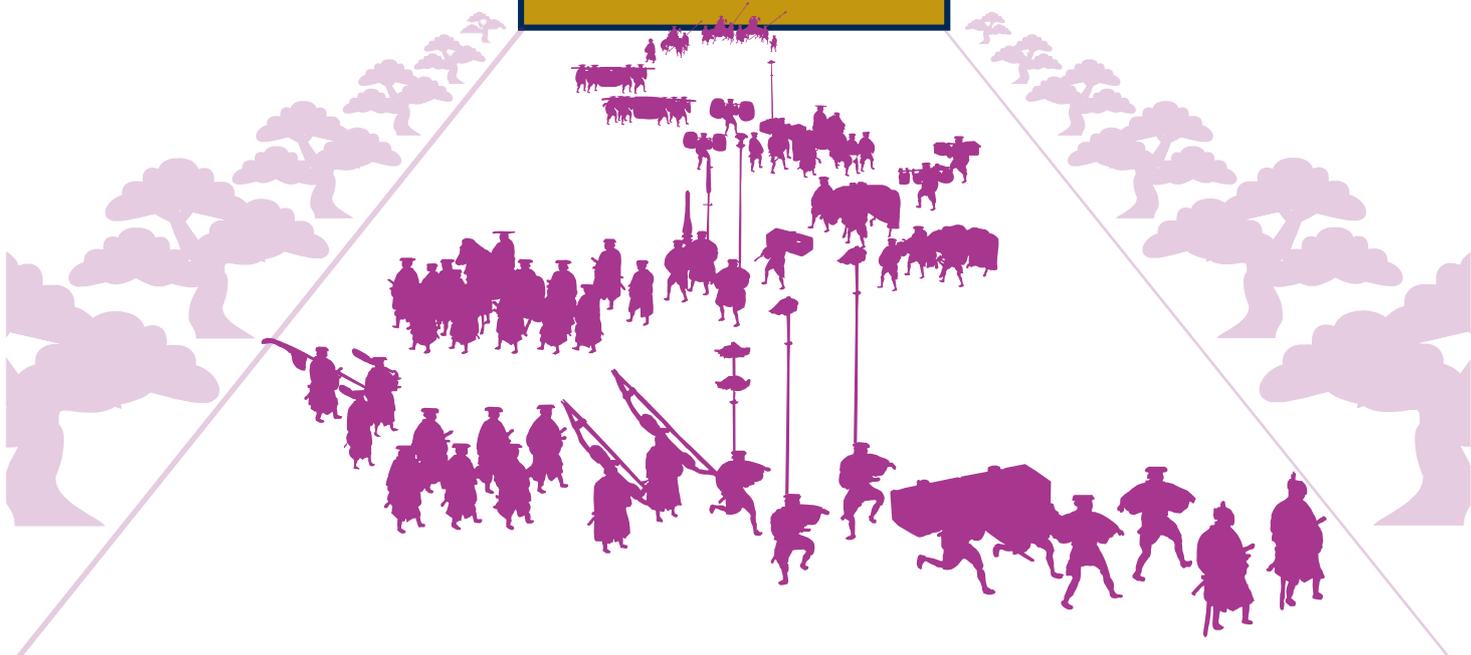
8:30～15:20

○水戸市

水戸道中・水戸城下町コース

○常陸太田市

棚倉道コース



第13回全国歴史の道会議茨城県大会

水戸道中・水戸城下町、棚倉道 ～歴史の道を活かした郷土愛の醸成～ 大会報告書

目次

開催要項	1
大会日程	2
第1日	
開会行事	4
開催地発表	
「借楽園記素読」	7
水戸市立五軒小学校児童の皆さん	
「歴史の道と文化財を生かしたまちづくり」	11
関口 慶久（水戸市教育委員会）	
記念講演	
「江戸時代の道はどのように使われたのか」	14
小野寺 淳（茨城大学教育学部 教授）	
報告1	
「二孝女物語～200年前の物語がよみがえる～」	19
常陸太田市立山田小学校児童の皆さん	
報告2	
「フィールドワークを通じた地域の歴史学習の取組」	24
茨城県立牛久高等学校生徒の皆さん	
報告3	
「桜川市歴史ウォーキングの実践」	31
宇留野 主税（桜川市教育委員会）	
報告4	
「徳川ミュージアムの取組」	38
渡邊 光恵（徳川ミュージアム 学芸員）	
講評	
佐藤 正知（文化庁文化財部記念物課史跡部門主任文化財調査官）	44
第2日	
歴史の道ウォーキングの様子	45
新聞報道	48
全国歴史の道会議開催地一覧	49

第13回全国歴史の道会議茨城県大会
水戸道中・水戸城下町、棚倉道
～歴史の道を活かした郷土愛の醸成～
開催要項

茨城県では、「茨城県歴史の道調査事業」を平成22年度から5か年計画で実施し、その成果として「茨城県歴史の道調査事業報告書」の古代編、中世編、近世編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、計5冊を刊行しました。調査の結果、歴史の道に沿う地域には貴重な文化遺産が残されていますが、史跡等に指定され保護されている一部の地域を除けば、歴史の道に関わる遺構や伝承が、急速に失われつつあることが改めて確認できました。

一方、本県においては、豊かな心を育む教育の充実のため、郷土の伝統や文化に対する愛着を深める教育を推進しています。また、心に潤いと感動をもたらす文化芸術活動を推進するために、「茨城県文化振興条例」が制定され、これを契機に文化財の保存と活用にもより一層努め、地域の文化遺産を活用した取り組みを通して、県民のさらなる郷土愛の醸成を図ろうとしているところです。

今般、全国歴史の道会議茨城県大会を開催することにより、身近な地域の歴史的環境や文化的景観を見つめ直し、地域で受け継がれた文化を再考する機会にするとともに、「歴史の道」を実際に歩き・み・ふれることによって地域の良さを再認識し、「歴史の道」の保存・活用に向けたきっかけにしたいと思います。また、この取り組みに児童・生徒が参加することにより、郷土を愛する心を育み、将来の茨城を担う次世代の人材の育成を図っていきたいと考えております。

- ◆ 主催 第13回全国歴史の道会議茨城県大会実行委員会
文化庁・茨城県教育委員会・水戸市教育委員会・常陸太田市教育委員会

- ◆ 後援 全国史跡整備市町村協議会・全国史跡整備市町村協議会関東地区協議会・茨城大学・茨城県観光物産協会・公益財団法人徳川ミュージアム・茨城新聞社・茨城放送・NHK水戸放送局・東日本旅客鉄道株式会社水戸支社・国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所

- ◆ 協力 水戸商工会議所・株式会社文化財保存計画協会・株式会社竹中土木

- ◆ 事務局 【第13回全国歴史の道会議茨城県大会実行委員会】
茨城県教育庁総務企画部文化課
〒310-8588 水戸市笠原町978番6 Tel.029-301-5447 FAX 029-301-5469
水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課
〒310-0852 水戸市笠原町978番5 Tel.029-306-8132 FAX 029-306-8693
常陸太田市教育委員会文化課
〒313-0055 常陸太田市西二町2200 Tel.0294-72-3201 FAX 0294-72-3310

「第13回全国歴史の道会議茨城県大会」日程
大会テーマ「歴史の道を活かした郷土愛の醸成」

●第1日目 【11月19日（土）】

会場：茨城県民文化センター小ホール 水戸市千波町東久保697

- 13:00 開演
- 13:00～13:20 開会行事
主催者挨拶 茨城県教育委員会教育長 小野寺 俊
文化庁文化財部記念物課長 大西 啓介
来賓挨拶 水戸市長 高橋 靖
- 13:20～13:40 開催地発表
「偕楽園記素読」
水戸市立五軒小学校児童の皆さん
「歴史の道と文化遺産を生かしたまちづくり」
水戸市教育委員会 関口 慶久
- 13:40～14:25 記念講演
「江戸時代の道はどのように使われたのか」
茨城大学教育学部教授 小野寺 淳
- 14:25～14:35 休憩
- 14:35～15:05 報告1
「二孝女物語～200年前の物語がよみがえる～」
常陸太田市立山田小学校児童の皆さん
- 15:05～15:25 報告2
「フィールドワークを通じた地域の歴史学習の取組」
茨城県立牛久高等学校生徒の皆さん
- 15:25～15:35 休憩
- 15:35～15:55 報告3
「桜川市歴史ウォーキングの実践」
桜川市教育委員会 宇留野 主税
- 15:55～16:15 報告4
「徳川ミュージアムの取組」
徳川ミュージアム学芸員 渡邊 光恵
- 16:15～16:25 講評
文化庁文化財部記念物課史跡部門主任文化財調査官 佐藤 正知
- 16:25～16:30 閉会挨拶

●第2日目【11月20日(日)】

○水戸市 烈公コース(水戸道中・城下町コース)

- ・国指定特別史跡「旧弘道館」、国指定史跡及び名勝「常磐公園」、旧彰考館跡(日本遺産構成要素)

8:30	水戸駅南口集合 受付・資料配付
8:40	出発
9:00～	吉田神社発 備前堀→銷魂橋→柳堤橋→坂下門→薬医門→大手橋を經由
10:30～11:30	旧弘道館見学
11:30～12:10	昼食(水戸市立三の丸小学校)
12:10～	城下町を通過して偕楽園へ 大町→宮町→黒羽町→梅香→鷹匠町→泉町→大工町→表門
13:50～	偕楽園着 休憩・見学
15:00	出発 千波湖畔P
～15:20	水戸駅南口ペDESTリアンデッキ黄門像前着・解散

○常陸太田市 義公コースⅠ(棚倉道コース)

- ・国指定史跡「水戸徳川家墓所」、国指定史跡及び名勝「西山御殿跡(西山荘)」

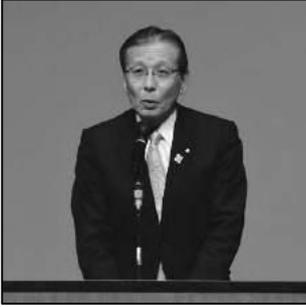
8:30	水戸駅南口集合 受付・資料配付
8:40	出発
9:20	道の駅着(トイレ)
9:50	水戸徳川家墓所着 ～11:00 水戸徳川家墓所見学 ～12:00 太田城跡着(常陸太田市立太田小学校)
12:00～12:40	昼食
13:10	梅津会館經由西山御殿跡(西山荘)着 ～14:00 西山御殿跡(西山荘)見学 ～14:20 常陸太田市立太田中学校駐車場出発 ～15:20 水戸駅着・解散

○常陸太田市 義公コースⅡ(棚倉道コース)

- ・国指定史跡「水戸徳川家墓所」、国指定史跡及び名勝「西山御殿跡(西山荘)」

10:00	常陸太田市立太田中学校駐車場集合 受付・資料配付
10:10	出発
10:20	水戸徳川家墓所着 ～11:30 水戸徳川家墓所見学 ～12:30 太田城跡着(常陸太田市立太田小学校)
12:30～13:10	昼食
13:40	梅津会館經由西山御殿跡(西山荘)着 ～14:30 西山御殿跡(西山荘)見学 ～14:50 常陸太田市立太田中学校駐車場・解散

主催者挨拶



茨城県教育委員会教育長
小野寺 俊

皆さん、こんにちは。本日は、第13回全国歴史の道会議茨城県大会が盛大に開催されますことに厚く御礼を申し上げますと存じます。また開催に当たり文化庁、水戸市、常陸太田市、徳川ミュージアムをはじめ、多くの皆様のご支援をいただいております。改めて感謝を申し上げます。

またこの2日間、全国の歴史愛好家の皆様がたくさんご来県をしておられることを心から歓迎申し上げます。大会テーマの中にも、「歴史の道を活かした郷土愛の醸成」とあります。まさにこの歴史の道を辿り、それぞれの土地の素晴らしい歴史や文化に触れることは、郷土愛を育む上で大変意義深いことであり、その地域の魅力を発信することにつながっていくと思っております。

ここで、茨城県のプロフィールを簡単にご紹介させていただきます。茨城県の人口は約291万人でございます。特徴としては、可住地面積が広く全国第4位であり、県内どこでも住むことのできる構造になっておりますが、県都水戸市の人口は27万人あまりで、県全体の人口の1割に満たず、数十万人規模の都市が県内各所に点在しております。これは全国的にも珍しい県の構造であると思っております。また、農業生産額は北海道に次いで全国第2位でありますし、色々な美味しいものがございます。一方、工業の面でも製造品出荷額において全国第8位でありますし、つくばや東海には世界に誇る先端科学技術の集積もございます。そして大洗に代表されるような海があり、百名山に数えられる名峰筑波山、自然に恵まれ気候も温暖、昔の風土記で「常世の国」と呼ばれたように、本当に恵まれた良い土地であります。

もう1つの特徴としてよく言われるのは、県民性からかPR下手ということ。恵まれていることが当たり前という感覚からか、自慢しないので外に伝わらないのではないかと思っております。これからは地方創生の時代であり、地域の魅力をしっかりと発信して多くの人を呼び込み、地域間競争に打ち勝っていくことが必要です。このことから、本県では魅力度アップを目指して様々な施策を展開しており、「のびしろ日本一」というキャッチフレーズで県をPRしております。また、我々県教育委員会でも中学生を対象に郷土のことを楽しみながら覚え、魅力をしっかりと理解し外に自慢していただくため、クイズ形式で競う「いばらきっ子郷土検定」という事業を行っております。本日もたくさんの子供たちに出席していただいておりますことから、是非この歴史の道という視点から茨城の魅力をしっかりと感じ取って、周りに自慢していただくと思っております。また、県外からお越しの方につきましても、是非茨城の魅力の一端を感じ取っていただけたらと思っております。

今日は2日間の歴史の道会議が、実り多いものになりますことを祈念いたしますと共に、ご参加の皆様のご健勝、ご活躍をお祈りいたしまして、主催者の挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

主催者挨拶



文化庁文化財部記念物課長 大西 啓介

皆さん、こんにちは。本日はあいにくの雨ですけれども、足元の悪い中、多くの方にご参加いただきましてありがとうございます。第13回全国歴史の道会議茨城県大会の開会に当たりまして、主催者として挨拶させていただきます。

文化庁では、人やもの、それから文化の交流の舞台となつてまいりました古くからの道を「歴史の道」と呼びまして、昭和53年から調査・整備事業を行つて参りました。歴史の道ということで代表的なものとしたしましては、栃木県の日光市にあります日光東照宮への参詣道であります「日光杉並木街道」、それから神奈川県にあります箱根の関所を通る道であります「箱根旧街道」などがございます。そういった道の学術的な調査、それから皆様に古道を歩いていただけるよう整備をしたり案内板を設置するといったようなことに対しまして、文化庁としてご支援を行っているところであります。

それから、歴史の道の周辺には、お城ですとか神社、お寺や古い町並みなどが多くございます。そういったものを道と一体として保存・活用を図る事業が「歴史の道事業」ということになります。その中で文化庁では、その歴史の道をどのように保存し、整備し、活用していくかということについて考える会議として、この「全国歴史の道会議」を主催することとしておりまして、平成2年に山形県で第1回の会議を開催して以来、2年にいっぺん、全国で開催しております。前回は徳島県で行いましたけれども、今回はここ茨城県で13回目の会議を開くということになります。

茨城県では、歴史の道に関する事業として、平成22年度から平成26年度まで、歴史の道の調査事業を行つていただいております。これまで江戸から水戸までの道であります水戸道中の報告書をはじめ、5冊の報告書が刊行されております。今大会の第1日目は、その調査委員会の委員長を務められました、茨城大学教授小野寺淳先生のご講演がございます。それから、小学生や高校生の皆様のご報告をはじめ、歴史の道に関する報告が行われます。また明日は、歴史の道ウォーキングということで、茨城大学のご協力のもと、特別史跡に指定され、日本遺産にも認定されております旧弘道館をはじめとして、水戸道中や水戸城下町を歩くコース、それからもう1つは史跡水戸徳川家墓所や、今年史跡及び名勝に指定されました西山御殿跡（西山荘）などを徳川ミュージアムのご協力のもと、徳川光圀が実際に通ったと考えられる道を歩くコースを用意してございます。この2日間、頭と体とを存分に使っていただける充実した内容になっているのではないかと思います。この大会を契機として、より多くの皆様に歴史の道を歩いていただきまして、健康の増進にも資するとともに、文化財への親しみも深めていただければというふうに思っております。

最後になりましたけれども、今回の開催地でございます茨城県、水戸市、常陸太田市の皆様、それから実行委員会の皆様、ご講演いただきます皆様に御礼を申し上げますとともに、ご参加くださっております皆様方のご健康を祈りつつ、挨拶を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

来賓挨拶



水戸市長
高橋 靖

皆さん、こんにちは。本日は、常陸太田市の大久保市長様、そして茨城県文化財保護審議会の糸賀会長様、徳川ミュージアムの徳川館長様がいらしてありますが、開催市の市長ということで代表してご挨拶させていただきます。

改めまして、13回目を迎えました全国歴史の道会議茨城県大会が、このように盛大に開催されますことを心よりお喜び申し上げます。また本日は全国各地より、ようこそ、この水戸の地へお越しいただきました。心から歓迎を申し上げます。皆様方には文化財の保護、あるいは歴史まちづくりによる地域振興などにご尽力いただいておりますことに、心から敬意と感謝の意を表したいと思います。

この歴史の道につきましては、普段何気なく歩いている道が、実はよく調べてみると歴史的な奥深い意味合いを持った道だということなのですが、ただ、お城や神社仏閣のように、一目で歴史遺産と分かるような状況にはないことから、道を保存して活用するという取り組みが、まだまだ全国的にも少ないのであろうというイメージを持っております。改めて、歴史の道を研究することにより、その地域がたどってきた歴史をしっかりとアピール・発信をしていくことができ、郷土愛の醸成にもつなげていけると思いますし、また、このことは研究を進める上でも重要なことであると思っております。

水戸市におきましては、平成21年度に歴史的風致維持向上計画が認定され、歴史的建造物や遺跡、それらをつなぐ道など、まち全体を歴史資源として捉えた、風格ある歴史まちづくりを進めているところです。特に、本市の玄関口ともいえる弘道館・水戸城跡周辺地区においては、日本遺産第1号に認定された「近世日本の教育遺産群―学ぶ心・礼節の本源―」の構成文化財である弘道館と旧水戸彰考館跡が所在するとともに、日本百名城に認定されております水戸城跡の土塁や塀などがあり、特色ある歴史的資源が集中して現存しております。そのため、本市としては、これらの地域を核とした歴史まちづくりを先導的に進めているところです。

歴史の道につきましても、弘道館の周辺や水戸城内を走る道を「歴史・観光ロード」と名付け、歴史的景観に馴染んだ道路整備を進めているところです。特に弘道館から大手橋を渡った先、白壁塀を設置したエリアについては、電柱地中化などの景観づくりを行い、歴史的風情のある道に造り変えました。明日の烈公コースのウォーキングでも、是非皆様に見ていただきたいと思っております。

ところで、本日の会議には、水戸市立五軒小学校や常陸太田市立山田小学校の児童の皆さん、県立牛久高等学校の生徒の皆さんが参加されます。本県の未来を担う児童生徒の皆さんが、この会議を通して郷土の歴史に親しむということは大変有意義であると思っております。皆さんの研究発表が実り多いものとなりますことを多いに期待しているところです。是非これからも郷土の歴史の素晴らしさを皆さんに語り継いでいっていただきたいと思っております。

最後になりますが、開催にあたりご尽力いただきました関係者のご労苦に心から敬意を表しますとともに、この会議が所期の目的を達成し大成功に導かれますことを心よりお祈り申し上げまして、歓迎とお祝いの挨拶に代えさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

開催地発表



偕楽園記素読

水戸市立五軒小学校の皆さん

沿革

明治 6年 5月 6日	文部省学制により五軒学校を開設する。
7年 7月 7日	上市小学校と改称する。
16年 4月	上市東小学校に改称する。
19年 12月	学区制定により、上市東・西尋常小学校が廃校となり、新たに上市尋常小学校となる。
45年 3月	校内に、電灯、電話を架設する。
昭和 8年 4月 1日	水戸市立五軒尋常小学校と改称する。
16年 4月 1日	勅令により、水戸市五軒国民学校と改称する。
18年 2月	給食施設が完成し、給食を開始する。
20年 8月 2日	水戸大空襲により、校舎を焼失する。
21年 6月30日	校舎を竣工（66坪）し、廊下まで利用し教育する。
22年 4月 1日	新学制により、水戸市立五軒小学校と改称する。
34年 7月	6コース20メートルのプールがPTA等の寄付により完成する。
60年 4月 1日	学校を五軒町1-6-8（現水戸芸術館）より現在地に移転する。
平成22年 11月 12日	関東甲信越地区小学校理科教育研究大会の公開授業を行う。
24年 2月 18日	第10回全国藩校サミット in 水戸で「偕楽園記」を暗唱発表し、喝采を浴びる。
24年 11月 9日	偕楽園を中心とした、地域の伝統文化の継承と地域を愛する子どもの育成に対して、博報賞「日本文化理解教育部門」と文部科学大臣奨励賞を受賞する。
25年 2月 20日	多年にわたる偕楽園でのボランティア活動に対して、県知事より感謝状をいただく。
25年 11月 9日	創立140周年記念式典を開催する。
26年 5月	ベルマーク収集活動で600万点を達成し、ベルマーク教育助成財団より表彰される。
26年 11月 14日	関東都県算数・数学研究大会茨城大会の公開授業を行う。
27年 11月 20日	6年生七面焼き作陶教室を行う。
28年 5月 6日	創立143年目を迎える。

◆◆◆◆◆ 五軒小学校で学んだ人々 ◆◆◆◆◆



画家 横山 大観（よこやま たいかん）1868～1958

下市（しもいち）三ノ町（現 城東2丁目）に生まれ、上市小学校（五軒小学校）に学ぶ。「無我（むが）」「生々流転（せいせいりてん）」「山路（やまじ）」などの作品を発表すると共に、指導者として日本美術の発展に貢献する。



画家 中村 彝（なかむら つね）1887～1924

上市（うわいち）寺町（現 金町3丁目）に生まれ、上市小学校（五軒小学校）に学ぶ。「エロシエンコ氏の像」「老母像」など、深い考えを凝（ひ）めた絵を描く。



作家 菊池 幽芳（きくち ゆうほう）1870～1947

上市（うわいち）長町10番地（現 五軒町3丁目）に生まれ、上市小学校（五軒小学校）に学ぶ。「己（おの）が罪（つみ）」「乳姉妹（ちきょうだい）」など、女性を主人公にした小説を発表する。



画家 辻 永（つじ ひさし）1884～1974

明治28年、菅谷小学校から転入学。本校に学ぶ。「山羊（やぎ）」の画家として独特の装飾的な作品を数多く描いた。日展理事長芸術会会員としてわが国の美術界に多くの業績を残した。



画家 五百城 文哉（いおき ぶんさい）1863～1906

水戸藩士の子として生まれ、創立2年目の五軒小学校で学んだ。上京してわが国の洋画の先駆者である高橋由一の門で洋画を学んだ。そして、内閣勸業博覧会等に出品するなど、画家として活動した。

うというのがこのことである。しかし人の生まれながらの気質とか気性というものは一人一人違っていて、同じというわけにはいかない。そうすると、時にかがみ時に伸び、時にゆっくりし時に急ぐというようにして、その天性と生命を全うするということは、他の万物と全く同じだということがいえよう。だから、ここで人間が善行を心がけて徳を修め、人と他の万物と異なる点(すなわち、道徳をわきまえず学問や諸芸を身につけるといふ人の人たるゆえん)をよく考えて実行することは、人間が天から受けた本性にしたがうということで、このようにして人間らしい心身の安定と悦楽が得られるのである。また一方、人が他の万物と同じ点(すなわち、時に屈伸緩急を必要とする点)を心がけて行うことは、長くその生命を保持することになるのである。そしてこの二つが調和良く実行されれば、これが善行を志す人間の最高の修養法であり養生法だといえる。これについては孟子の言に「養生法が正しくなされれば、万物必ず成長し、それが失われれば必ず消滅してしまう」とあるが、そのとおり、これまた自然界のなりゆきなのである。であるから人間もまた気をゆるめ身体を休める必要があるのは言うまでもない。思えばあの孔子が弟子の曾點の心がけに同感したことや、孟子が夏(か)の国の諺をほめたことなど、まことにそのとおりもつともな事と思ふ。さて、それでは、このような道理にしたがつてこれを実行するとすれば、心身をゆるめて身体の安定と精神の愉悅をはかるのは一体いつがよいかということだが、花の美しく咲く朝まだきに詩歌を口ずさみ、月明の宵に酒宴を楽しむのは必ず学問をみっちりした余暇にすることであり、鷹を原野に放つて獵をしたり、山や谷に獣を追つて狩りを楽しむのは必ず武芸をみっちりやつた後にすることである。

私は以前、藩主になつてはじめて水戸に帰国した時に、領内の山川をわたりあるき、原野をあまねく見てまわつたが、その時城の西方に広大な眺望の開けた土地のあるのを見つけた。そこは西に筑波の峯を望み南は千波湖に面して、およそ城南のすばらしい景色が一目で見渡せるところである。また、遙か遠くの間々も手にとるように見える、その山々の緑や青が重なり合つてその色いよいよ深く、四周見渡す限り全く一様のすばらしい景色である。ここで思うに、山は動植物を發育させ、水は魚類を飼ひ馴らすところといわれるから、この山水の美を備えたこの場所こそ、孔子の言そのままに知と仁の趣を兼ね備えた遊樂の里といふべきであらう。そこで私は、ここに梅の木数千本を植えてここが真つ先に春が来るところだと示したい。またここに二つのあずまやをつくり、一つを「好文」一つを「一遊」と名づける。これまたただこれから後、皆が外出時の単なる休憩所にあてるだけのものでなく、わが藩

内の人々にゆつくりくつろいで心身を保養する場所とさせたいとの望からである。藩中の人々はこの私の真意をよく心にとどめ、一日中を怠ることなく修養と仕事に励み、暇がある時に親戚や友人と一緒に、好文亭と一遊亭の間をそぞろ歩きするがよい。また、詩歌を唱え合つたり、管弦の樂器を奏するもよく、また、紙をひろげて書画の筆をふるつたり、庭石に座つて茶をたてるもよい。また、酒を飲む者は目近に花を眺めながら瓢箪や酒樽を傾けるもよいし、釣りを樂しむ者は千波湖に釣竿を投げるのもよからう。要はその場合、それぞれの遊樂の気分に応じて、心身をゆるめたりひきしめたりすることで、そうすれば心身保養のよき成果が得られるであらう。これが、私が藩中の多くの者と樂しみを同じくするという本意である。そういう意味でこの園を「偕樂園」と名づける。

天保十年、年まわり己亥(つちのとい)の夏五月に建てる。私景山が文を作り、書もまた同じ、及び、上の額に「偕樂園記」と題した文字も私の筆である。

(望月安雄氏記)



偕樂園記

齊昭自撰、自書による、偕樂園開設の精神を明示したもの。一張一弛緊張とリラックスの文字が刻まれ、弘道館と偕樂園が一对の施設であることを明示している。

借樂園記 読み下し文

天に日月あり。地に山川あり。万物を曲成して遺さず。禽獸草木、各々その性命を保つものは、一陰一陽その道を成し、一寒一暑その宜しきを得るを以てなり。これを弓馬に譬う。弓に一弛一弛ありてつねにつよく、馬に一馳一息ありて恒に健し。弓に一弛なければ、即ち、必ず撓たわみ、馬に一息なければ、即ち必ずたおる。是れ自然の勢なり。それ人は万物の靈にして、その或は君子となり、或は小人となるゆえんのものは何んぞや。その心の存すると存ぜざるとにあるのみ。

語に曰く、性相近く、習相遠しと。善に習えば即ち君子となり、不善に習えばすなわち小人となる。今、善なる者を以てこれを言え、四端を拡充して以てその徳をおさめ、六芸に優遊して以て其の業を勤む。これその習すなわち相遠きものなり。然りし而して、その氣稟きりんあるいは齊しきこと能わず。これを以て、屈伸緩急相待ちて、その性命を全うするものは、夫の万物と何を以て異ならんや。故に心を存して、徳を修め、その万物と異なるものを養うは、その性に卒うゆえんにして、形を安んじ、魂を怡よろこましむ。その万物と同じきものを養うは、その命を保つゆえんなり。二者その節に中れば、善く養うといふべし。故に言わく、いやしくもその養を得ば、物として長ぜざるはなく、いやしくもその養を失えば物として消ぜざるはなしと。これまた自然の勢なり。然らばすなわち、人もまた弛息無かるべからざるや固よりなり。嗚呼孔子の曾点に与せる、孟軻の夏諺を称せる、誠に故有るなり。

果たして此の道によれば、すなわちその弛息して形を安んじ、魂を怡よろこましむこと、まさにいずれの時にして可らんや。必ずその華晨けんに吟詠し、月夕に飲饌いんせんするものは、文を学ぶの余なり。鷹を田野に放ち獸を山谷に驅る者は武を講ずるの暇なり。

余かつて吾が藩に就き、山川を跋渉し、原野を周視し、城西に團圞だんらんの地に有るにあう。西筑峯を望み、南儂湖に臨む。凡そ城南の勝景、皆一瞬の間に集まる。遠轡えんじ遙峰、尺寸千里、翠をあつめ白を畳み、四瞻せん一の如し、而して山は以て動植を發育し、水は以て飛潜を馴擾す。まことに知仁一趣の楽郊といふべきなり。

ここに於て梅樹数千株を芸え以て魁春の地を表わす。又二亭を作り好文と言ひ一遊という。ただに以て他日芟はら憩けいの所に供するのみに非ず。けだしまだ国中の人をして優遊存養するところあらしめんと欲す。国中の人いやしくも吾が心を体し、夙夜おたらず、既によくその徳を修め、又よくその業を勤め、時に余暇あるや、すなわち親戚相携え、朋友相伴ひ、悠然として二亭の間に逍遙し、或は詩歌を倡酬しょうしゅうし、或は管絃を弄撫し、或は紙をのべて毫を揮ひ、或は石に座して茶を点じ、或は瓢樽を

花前に傾け、或は竹竿を湖上に投ず。ただ意の適する所に従いて、弛張せば、すなわちその宜しきを得ん。

これ余が衆と樂しきと同じくするの意なり。よりてこれに命じて借樂園という。天保十年歲次己亥夏五月建 景山撰並びに書及び篆額

(碑陰) 禁条

凡そ園亭に遊ぶ者は卯(午前六時)に先んじて入り、亥(午後十時)に後れて去るを許さず。男女の別よろしく正すべし雜沓ざさつ以て威儀を乱すを許さず。沈醉しんせい譁暴及び俗樂もまた宜く禁すべし。園中の梅枝を折り、梅実を采るを許さず。園中、病無き者はかごに乗るを許さず。漁獵りやく禁あり、制を踰ゆるを許さず。

現代語訳

天上には日と月があり、地上には山と川がある。自然は万物をこのように一つ一つ細かく完全に造り成している。鳥獸や草木がそれぞれ生まれながらの天性と生命を保っているのは、このように陰と陽、寒と暑というような相反するものが自然の道理にかなない調和を保っているからである。これを弓や馬にたとえ、弓には弦を張るときとはずして弛める時があつて常に強く、馬も一走りするときと一休みするときがあつて常に丈夫なのである。弓の弦を張りつめたままゆるめずにおけば、弦はたるんで使いものにならなくなり、馬も休ませなければ必ず弱つて死んでしまう。これは自然界のなりゆきである。人間は万物の靈長と言われるが、その或るものは立派な人間となり、或るものはとるに足らぬつまらぬ人間になるというのはどういうわけであろうか。それはその人に善行を志して徳を修める心があるかないかによるだけである。孔子の論語に「人の本性はもともと同じで、生まれながら善い行いをする性質をもっているが、その後の生活習慣の違いに大きな差ができる」という言葉があるが、全くそのとおりで、本性にしたがつて善行を習慣とすれば立派な人間になり、不善を習慣とすればとるに足らぬ人間になるのである。ここで善行を志す人の場合について述べると、その人は仁・義・礼・智という人として備うべき四つの基本道徳をひろくしつかり学び、これによって徳を修めるとともに、また人として学ぶべき六つの教養徳目である礼法・音楽・弓術・馬術・書道・算数をこころゆたかに身につけ、これを業務に生かして勤める。その生活習慣の違いによつて、善行を志す人とそうでない人との差が大きくへだたつてしま

発表者一覧

浅倉 龍之介
小沼 菜南
尾張 葉月
梶山 翔生
神岡 大輝
鴨志田 紗誉
田中 涼葉
澤畑 周希
日比野 敬史
宮田 陽菜

旭 美彩都
植田 華禾
海老澤 大成
大内 喜介
大作 慈穂
小野瀬 温斗
加藤 理沙
菊池 智也
木村 凜夏
小杉 マチュー

齊藤 梨世
関口 雅久
平 萌香
谷川 颯汰
豊田 陽菜
根本 大輝
袴塚 俊汰
山内 佳乃





歴史の道と文化財を生かしたまちづくり

水戸市教育委員会事務局

関口 慶久

1. 水戸のまちの特徴

水戸市は、大串貝塚、吉田古墳、台渡里官衙遺跡群などの原始・古代の遺跡から、水戸市水道低区配水塔や水戸東武館などの近代・現代の建造物まで、たくさんの文化遺産が残る歴史のまちです。

こうした長い歴史の中で「水戸」の名前が全国に知れ渡ったのは、水戸徳川家が水戸城に入城し、水戸藩が成立した江戸時代でした。水戸徳川家は、尾張徳川家（愛知県）・紀伊徳川家（和歌山県）とともに「御三家」と呼ばれ、徳川将軍家を支える特別な存在でした。

表1は、関東地方の石高順位を表したものです。実は関東地方は、100万石といった大きな藩はありません。水戸藩は2位の川越藩の2倍以上の、関東地方最大の35万石を有していました。中心地である水戸のまちは、関東でも最大規模の城下町としてにぎわったのです。御三家水戸藩の城下町。それが、水戸のまちの大きな特徴といえます。

表1 関東地方の石高（表高）ベスト10（木村礎ほか編1989『藩史大事典』第2巻 雄山閣を元に作成）

順位	現在地	藩の名前	最高石高	最高石高の時の大名家	家格
1	茨城県	水戸藩	35万石	水戸徳川家	御三家
2	埼玉県	川越藩	17万石	越前松平家	親藩
3	茨城県	古河藩	16万石	土井家	譜代
4	栃木県	宇都宮藩	15万5千石	本多家	譜代
5	群馬県	前橋藩	15万2500石	酒井家	譜代
6	千葉県	佐倉藩	14万2000石	土井家	譜代
7	神奈川県	小田原藩	11万3000石	大久保家	譜代
8	埼玉県	忍藩	10万石	阿部家	譜代
9	茨城県	土浦藩	9万5千石	土屋家	譜代
10	群馬県	高崎藩	8万2千石	大河内松平家	譜代

2. 歴史の道を生かす

水戸のまちは、昭和20年の水戸大空襲により、たくさんの歴史的な建物が失われてしまいました。しかし、まちの区画の大部分はそのまま残されたため、現在の道の多くが、江戸時代以前から使われている「歴史の道」になっています。

水戸市では、こうした歴史の道のうち、弘道館・水戸城周辺の道や、偕楽園周辺の道を「歴史・観光ロード」として、白壁や土色の道の整備、電線の地中埋設を進めています（図1）。



図1 歴史・観光ロード景観整備前（左・出典：Google Map）・整備後（右）

3. 文化遺産を生かす

一般的に、歴史の道沿いには、お城、お寺、民家、塚、石造物など、大小さまざまな文化遺産があります。そのため、歴史の道を魅力あるものにしていくためには、歴史の道沿いにあるこうした文化遺産の魅力も、一緒に磨き上げていく必要があります。

水戸市が整備している弘道館（日本遺産構成文化財）・水戸城跡周辺地区の歴史・観光ロードにも、歴史的価値の高いたくさんの文化遺産が現存しています。その多くが弘道館周辺に存在する一方で、水戸城の本丸・二の丸周辺（県立水戸第一高等学校，県立水戸第三高等学校，市立第二中学校，茨城大学教育学部附属小学校・幼稚園）には、水戸城薬医門などをのぞいて、現存する文化遺産はそれほど多くありません。

そのため、水戸市では本丸・二の丸周辺の文化遺産の魅力アップを図るため、水戸城歴史的建造物のうち、大手門・二の丸角櫓・土塀の復元プロジェクトを、市民と一緒に進めています（図2・3）

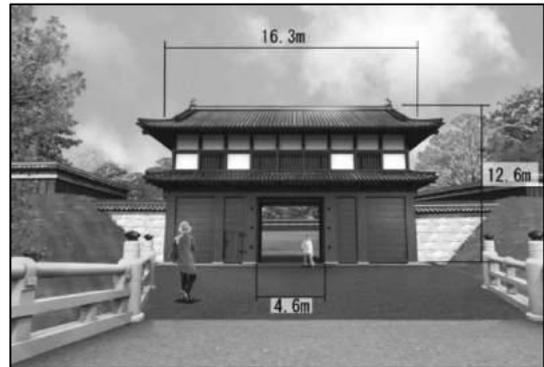
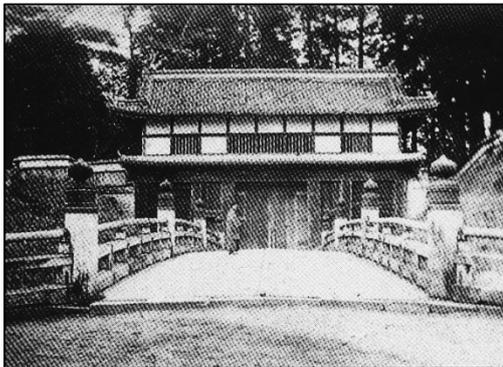


図2 江戸時代の水戸城大手門（左）・大手門の復元イメージ（右）

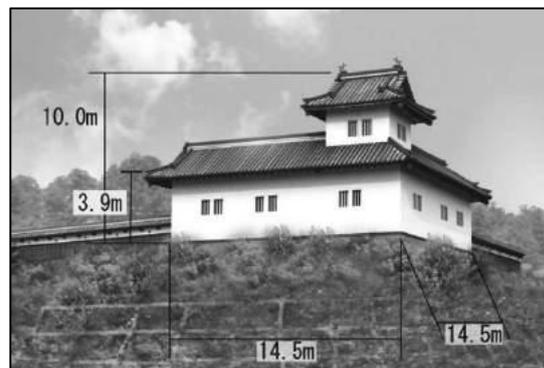


図3 江戸時代の水戸城角櫓（左）・二の丸角櫓の復元イメージ（右）

4. 歴史まちづくり

歴史の道と文化遺産。これらを大切に保存・活用し、まちづくりにつなげていく。このように、歴史建造物などの文化遺産だけでなく、道を含む町並みや、お祭りなど歴史に関係する人々の活動も含めて、まとめてまちづくりに生かしていく取組を「歴史まちづくり」と呼んでいます。

水戸市は歴史まちづくりを推進していくため、平成 22 年 2 月、全国 13 番目の歴史まちづくり認定都市となりました。実は、空襲によって被災した都市のなかでは、全国で最初の認定都市となります。

被災によって歴史的建造物の多くが失われた一方、市内には、弘道館・水戸城跡周辺地区だけでなく、日本三名園の一つである偕楽園周辺地区、下市の町人文化が残る備前堀周辺地区、徳川光圀が愛した保和苑周辺地区などの特徴ある歴史地区があります（図 4）。

今後は、こうした地区の歴史的な特徴を精一杯引き出して、みなさんが楽しめる歴史まちづくりを一步一步進めていきたいと考えています。



第 4 図 偕楽園（左）・備前堀（中央）・保和苑（右）

○関口 慶久（せきぐち のりひさ）

水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課文化財係長。

研究分野は日本考古学。専門は中～近世。近年の論考等に「水戸城における堀の展開―障子堀の理解に寄せて―」（『中世城郭研究』第 30 号，2016），「茨城県・千葉県における板碑の終焉」（『中世墓の終焉を考える―関東における板碑の終焉を通して―』，中世葬送墓制研究会，2016），「茨城県における東部・南部の条里」『関東条里の研究』（関東条里研究会，2015）などがある。



江戸時代の道はどのように使われたのか

茨城大学教育学部教授

小野寺 淳

1. はじめに

現代の道は、道が舗装され、道幅が拡幅され、バイパスが設けられ、高速道路ができるなど、交通の発達とともに変化してきました。おそらく、平安時代の道、鎌倉時代の道、江戸時代の道が、どこを通っていたか、今ではわからなくなっていました。かつての道がどこを通り、道にはどのような家々が建ちならび、道の駅のような休憩する場所があったのか、現代の道路標識にあたるものはあったのかなど、さまざまな疑問がわいてきます。忘れ去られた古代から江戸時代までの道の変遷を明らかにしておくことは、現代に生きる私たちにとって、先人たちの知恵や生活の一端を知り、また未来に生きる人々へのメッセージになることでしょう。

文化庁は、1978年度より「歴史の道」調査事業を都道府県別に行いました。茨城県では2010年度から5か年で実施しました。失われつつある歴史の道（古道・水路）とそれに沿う地域に残されている歴史的遺産を周囲の環境を含めて総合的かつ体系的に調査するとともに、これらの保存・活用の計画策定のための基礎的資料の確保を目的としています。県内全域にわたって、近世以前に所在した歴史の道、及びこれに沿う歴史遺産について現地調査を実施し、基礎的な資料の収集と実態の把握を行いました。調査事業を通して、歴史の道と周辺に残されている文化財の特色や歴史的価値を明らかにすることにより、今後の保存と活用を図るための基礎的な資料とします。また調査事業及びその成果をもとに、歴史の道とその周辺における歴史的環境や文化的景観の見直しを行い、歴史的遺産の保存、活用及び普及啓発活動に役立てるものです。文化庁では1993年度から「歩き・み・ふれる歴史の道事業」を実施しています。

2. 江戸時代の道を調べる

茨城県内の江戸時代の主要な道として、江戸幕府の元禄常陸国絵図（図1）・元禄下総国絵図（国立公文書館蔵）に描かれた道を江戸幕府公認の主要道と判断し、水戸道中、岩城相馬道、日光道中、関宿通多功道（日光東往還）、結城道、瀬戸井道、棚倉道、南郷道、那須道、宇都宮道、飯沼道を取り上げました。また、これらの主要道と交差する水運と河岸を取り上げています。

江戸幕府の国絵図事業では、絵図元の諸大名に国絵図のほか、正保期には城絵図、郷帳、道帳の作成も命じました。諸大名から献上された上記の正保国絵図一式は、明暦大火により焼失、このため寛文期に諸大名に再度提出を求めています（川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』古今書院）。しかし、この寛文期に再提出されたものも、その一部が国立公文書館に伝来するのみであり、これまで諸大名文書の控図や写図、ならびに文書に基づいて研究がなされています。常陸国についていえば、正保国絵図が伝来しないものの、城絵図と郷帳は国立公文書館に、道帳は「常陸地理苞括誌」という写本として三井文庫に伝来しています（『茨城県立歴史館史料叢書五』所収）。正保の道帳もまた、元禄常陸国絵図・元禄

下総国絵図とともに活用しました。

このように、江戸幕府撰国絵図事業の絵図と道帳を基本史料として、明治前期に作成された手書き彩色二万分の一地形図(水戸市域より以南)、迅速測図、ならびに明治末作成の五万分の一地形図、さらにその後刊行の地形図をもとに江戸時代の道を推定しました。この推定した道を歩きつつ確認し、現行の国土基本図(自治体の都市計画図)に朱筆を入れていくことになります。現地を歩きつつ、架橋された箇所では渡船場や橋の位置を確認、工場などの施設で中断した道などは地籍図で確認、伝承をもとに一里塚(一里山ともいう)・道標・小祠などの位置の推定などを行いました(図2)。道の両サイド1キロメートルの幅を歩きながら行い、同時に建造物はもとより石塔・石仏に至るまで、現存を確認するように努めました。

ところで「水戸街道」という名称は安永6年(1777)の道標に刻まれたのが初出です。五街道の名称は古代の五畿七道によるとし、江戸幕府は日光海道と記すのは誤りであり、道中と呼ぶようにと通達しました。そこで、ここでは水戸道中と呼ぶことにします。



図1 元禄常陸国絵図(国立公文書館蔵)



図2 「歴史の道調査事業」調査風景

3. 参勤交代

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦い以降、江戸へ参勤する大名がみられるようになりました。そこで江戸幕府は、1602年に東海道(京三条まで126里6町1間, 53宿, 大坂まで4宿), 1603年に中山道(草津まで129里10町8間, 67宿, 京まで69宿)を制定し、以後、甲州道中(甲府, 下諏訪まで53里24町余, 44宿), 日光道中(日光まで36里11町20間, 23宿), 奥州道中(日光道中を宇都宮で別れ, 白

河まで)と順次整備されていきます。このとき、日光道中の附属道として水戸佐倉道と関宿通多功道なども加えられました。水戸佐倉道は千住宿(現 北千住)で日光道中と分かれ、新宿(葛飾区)で水戸道と佐倉道に分岐します。水戸―江戸間は29里19町(約116km)、2泊3日(大名行列は3泊4日)の道程でした。水戸佐倉道の千住から松戸までは江戸幕府の道中奉行が管理することになり。このように長い道のりを歩くので、どのくらい歩いたのか、目安が必要でした。それが一里塚で、道の両側に一基ずつ建



図3 石岡の一里塚(県指定文化財)

てられました(図3)。水戸市街地の南には一里塚というバス停があります。水戸―取手間にあった18の一里塚のうち10か所の一里塚ならびに一里塚跡や地名を確認することができました。

寛永12年(1635)、徳川家光は『武家諸法度 寛永令』で参勤交代を明記し、寛永19年(1642)には譜代大名を含む大名ならびに格式の高い旗本(常陸国では志筑の本堂家)が参勤交代の対象となりました。ただし、老中・大阪城代などの在任中は免除されます。永井博氏の研究によれば、水戸徳川家の参勤交代は計34回でしたが、天保5年(1834)の徳川斉昭の就封の参勤交代では総勢1019人であったとのことです(永井博『参勤交代と大名行列-歩く・観る・学ぶ』洋泉社)。また、寛政4年(1792)の土浦の土屋英直の就封では、総勢180人程度であったといわれています。江戸時代後期、水戸道中は水戸徳川家と土屋家のほか、中村の相馬家、磐城平の安藤家、泉新田の本多家、湯長谷の内藤家、笠間の牧野家、志筑の本堂家、牛久の山口家が参勤交代を行いました。幕末の文久2年(1862)、軍備補強と海岸警衛のため、参勤交代3年に1回に改められ、江戸に置かれた妻子の帰国が許可され、実質的に参勤交代はなくなりました。

4. 陸路と水路

江戸時代初期から享保期ころまで、水戸道中では宿場町の整備や道の一部変更が続きました。水戸道中は水戸城下の本四町目(現 本町二丁目)までですが、本町を含む下町は寛永2年(1625)から低湿地を埋め立てて造成されました。一方、江戸から北上すると、江戸時代初期は我孫子宿から台地を北東へ向かい、現在の布佐で利根川を渡り、布川へ着く道でした。やがて現在の国道6号の大利根橋付近で利根川を渡り、取手宿に入る道に変更されたと言われています。寛文6年(1666)の利根川洪水により、取手宿は利根川に並行する町並みとなります。寛永6年(1629)に小貝川と鬼怒川が分離される以前、藤代宿周辺には広い湿地帯が広がっていたと考えられます。このため、宮和田河岸から小船で小貝川を渡り牛久へ向かう場合もありました。このように江戸時代の道は宿場町を計画的に整備し、渡船場を設け、低湿地を埋め立て、あるいは台地に直線の道を通すために林野を切り開くなど、部分的な変更を繰り返し、ようやく幕末まで続く水戸道中となったの



図4 那珂湊の廻船問屋の蔵

です。

参勤交代にともない道と宿場の整備が進み、大名に仕えた武士は領国（支配地）の城下と江戸の大名屋敷の間をしばしば往来するようになります。城下町や宿場町、湊町や門前町などの町場では、市の日いちに商人が荷物を持って来て、商品を販売しました。やがて、町場にも経済力のある商人が成長し、那珂湊（ひたちなか市）で豪商と呼ばれた大内家や近藤家といった廻船問屋、利根川や鬼怒川から江戸川を通り江戸と地方を結ぶ川船の河岸問屋も登場します（図4）。利根川から江戸川に分岐する境町の河岸問屋小松原家、潤沼西端に位置する海老沢河岸（茨城町）の河岸問屋川崎家なども有数の豪商でした。このように、陸路と水路によって、全国的な流通が行われるようになり、江戸時代の茨城県でも商人が盛んに行き交いました。

5. 社寺参詣などの旅

社寺参詣と湯治を名目とした領外への出入りが許可されるようになると、武士や商人などのみならず、農民（百姓）の旅も活発になっていきます。17世紀後半からは、西国三十三か所観音巡礼や伊勢参宮、富士山や出羽三山などの山岳信仰への旅が盛んになっていきます。多くは農民の男性による旅で、村のリーダーが人生の節目に必要な未知の世界を見聞する旅でもありました。一方、茨城県内へも、江戸の町人が筑波山や愛宕山への山岳信仰、鹿島神宮・香取神宮・息栖神社の三社詣などに訪れるようになります。

もちろん、江戸からのみならず、常陸国の様々な社寺へ参詣する人々が増えると、道案内が必要になります。たとえば、大甕神社下の三叉路には、「従是 泉川道」の道標があります（図5）。明和8年（1771）4月に奥州岩瀬郡須賀川の泉屋忠兵衛が建立しました。泉屋は薬種問屋で、牡丹の栽培を始めたことで知られています。後の須賀川の牡丹園です。なぜ、須賀川の泉屋が泉川観

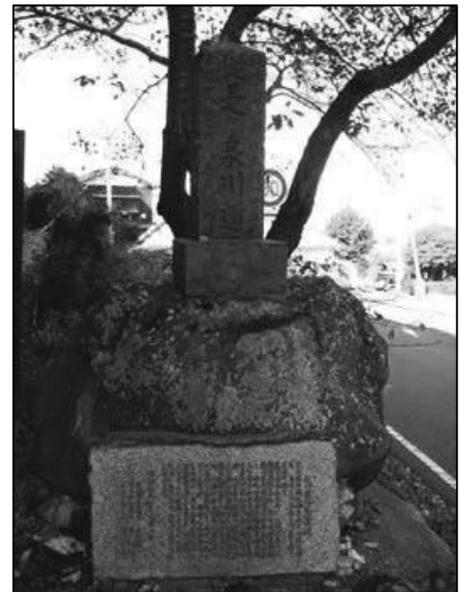


図5 泉川道標（日立市）

音への道しるべを建立したのかはわかりませんが、遠方からの泉川観音への参詣がすでにあつたことがわかります。このような道しるべ単独の例もありますが、茨城県に残る道標の多くは、たとえば馬頭観世音という石塔に「右〇〇 左〇〇」などと刻んだ併用道標であることを確認することができました。

こうした時代背景のなか、親孝行な娘二人旅を紹介しましょう。文化元年（1804）、豊後国大野郡川澄村（大分県臼杵市）の農民、初右衛門は親鸞聖人の遺蹟巡拝の旅に出ました。しかし途中、常陸国久慈郡東蓮寺村（常陸太田市東連地町）の青蓮寺で病に伏せました。長らく消息不明であった父の所在が偶然判明、1811年6月、父に会うため、豊後国から「つゆ」と「とき」の姉妹が東蓮寺村へ旅立ちました。苦勞の末、江戸からは小幡宿を経て水戸道中を通り、10月に青蓮寺にたどり着きます。二人の親孝行の姉妹の話は、当時から記録に残され、今も語り継がれています（豊後国の二孝女研究会編『豊後国の二孝女』）。

幕末の嘉永4年（1851）には、吉田松陰も水戸道中を歩いて、水戸城下の永井家に身を寄せます。約1か月滞在し、会沢正志齋らと面会しました。その後、松陰は会津そして津軽を目指し、岩城相馬道を歩きました。赤浜村（高萩市）の長久保赤水生家を通るなど、現在でも松陰の足跡をたどることができます。

6. おわりに

江戸時代の水戸道中と岩城相馬道は、以北の宮城県岩沼までを含めて、明治5年（1872）、陸前浜街道と呼ばれることになりました。その後、大正9年（1920）には番号制が採用され、東京一仙台間を国道6号という名称に変更されました。国道6号は「ろっこく」と親しみをこめて呼ばれることもあります。道は今でも人々の生活に深くかかわっています。昔の道もまた、身分を問わず、人々に親しまれ利用されてきたのです。古道を歩き、見て、ふれ合うことは、先人たちの知恵や生活の一端を知る絶好の機会といえるでしょう。

<報告書>

茨城県教育庁文化課編（2015）：『古代東海道と古代の道』茨城県教育委員会

茨城県教育庁文化課編（2015）：『鎌倉街道と中世の道』茨城県教育委員会

茨城県教育庁文化課編（2013）：『水戸道中』茨城県教育委員会

茨城県教育庁文化課編（2014）：『日光道中・関宿通多功道・結城道・瀬戸井道』茨城県教育委員会

茨城県教育庁文化課編（2015）：『岩城相馬道・棚倉道・南郷道・那須道・宇都宮道・飯沼道』茨城県教育委員会

○小野寺 淳（おのでら あつし）

茨城大学教育学部教授。文学博士。

研究分野は歴史地理学、地図史、近世交通史。主に江戸時代の地図、旅と街道、茨城県内における近世・近代の都市・農村の景観変化などの研究を行っている。研究業績に『近世河川絵図の研究』（単著、古今書院、1991）、『歴史地理調査ハンドブック』（共編著、古今書院、2001）、『国絵図の世界』（共編著、柏書房、2005）、「古地図と歩こう！水戸の城下町マップ」（著作者、茨城大学図書館）、『絵図学入門』（共編著、東京大学出版会、2011）、『茨城の謎 地理・地名・地図』（監修、実業之日本社、2014）、『シーボルトが日本で集めた地図』（共編著、古今書院、2016）などがある。

報告1



二孝女物語

～ 200年前の物語がよみがえる～

常陸太田市立山田小学校児童の皆さん

はじめに

私たちの山田小学校は、常陸太田市北部の美しい自然と豊かな歴史にめぐまれた地域にある学校です。毎日、全校生62名は、「【や】るきのある子」「【ま】ごころのある子」「【た】くましい子」を合言葉にして、夢に向かって明るく元気に活動しています。特に、中・高学年生は、総合的な学習の時間などを利用して、学区内にある青蓮寺に伝わる『二孝女物語』を題材とした学習に取り組んできました。また、これまでに『二孝女物語』を通じて、大分県臼杵市の川登小学校との交流も進めてきました。

本日は、私たち5・6年生が、地域に伝わるこの『二孝女物語』を演劇にして、会場の皆様を紹介したいと思います。これまで練習を重ねてきたこの演劇を通して、親と子の気持ちをつなげだ道、現在と200年前の物語をつなげた道、茨城県と大分県の交流につなげた道について考え、郷土の先人の思いや願いを感じながら、会場の皆様と優しい気持ちになれたら嬉しいです。

「二孝女物語」を生かした山田小の取組み

1. 青蓮寺の見学及び学習

平成 23 年度から第3学年を中心に青蓮寺の見学や学習を行っています。住職さんからお話を聞いたり古文書を見たりして、改めて二孝女物語に対する興味と関心を高め、その後の学習につなげています。



2. 道徳の授業での取組

第3学年を中心に、二孝女を題材とした道徳の授業を行っています。掲示物や衣装を用意し、ロールプレイングを交えながら、先人の思いや願いから学ぶ活動に取り組んできました。



3. 対外的行事での発表

平成25年12月には、第3～5学年が「人権啓発事業ハートフルフェスタひたちおた」で、また、本年9月には、第5・6学年が「少年の主張茨城県大会」で発表し、表現力を高める学習の機会とするとともに、思いやりの心や郷土のすばらしさなど伝えてきました。



4. 臼杵市立川登小学校との交流活動

「豊後国二孝女物語」の縁で、臼杵市立川登小学校との交流を継続しています。毎年年度末に、第3学年が総合的な学習の時間で調べてまとめた作品を川登小学校に送っています。また、平成26年には、第6学年児童4名が川登小学校を訪問し児童との交流や、二孝女関連の史跡見学をしました。帰校後、臼杵市から贈られた紙芝居を使って、交流活動の報告会を行いました。



5. 「二孝女顕彰会」の方々との交流

山田小学校学区には、豊後国二孝女物語の精神を広く伝える「二孝女顕彰会」があります。様々な形で本校の「二孝女物語」の教育活動に支援をいただいております。臼杵市からの訪問団をお迎えしたり、5学年が青蓮寺への記念植樹に招待されたりして、交流を行っています。



演劇「二孝女物語～200年前の物語がよみがえる～」



豊後国の二孝女物語【常陸太田市】

豊後国の二孝女物語は、今から約200年前、遠く豊後国（大分県）から常陸国（茨城県）へ病の父を迎えにきた二人の娘の親孝行の物語です。

文化元年（1804）3月、豊後国川登郷泊村（現大分県臼杵市野津町大字泊）の農民初衛門は、親鸞聖人の遺跡を訪ねる旅に出ましたが、旅の途中で持病が悪化し、常陸国東蓮寺村（現茨城県常陸太田市東連地町）の青蓮寺にたどり着いたところで、ついに動けなくなってしまいました。青蓮寺の住職証吟は、初衛門を寺の弟子にして名を教西と改めさせ、小さな家を建てて面倒を見ることとしました。

文化8年（1811）、親鸞聖人の550回大遠忌のために京都西本願寺に行った証吟は、そこで偶然にも初衛門の菩提寺善正寺の住職浄範と出会い、初衛門のことを伝えました。臼杵に戻った浄範がそのことを初衛門の家族に知らせると、二人の娘つゆ（22歳）・とき（19歳）は大変喜び、父を迎えに行こうと考えました。村人から非難・反対を受けましたが、姉妹の決意は固く、奉行所はその熱意を感じて旅立ちを認めました。願いがかなった姉妹は、早速髪を切って醜い姿となり、災いを招くとしてお金は持たずに、8月11日に臼杵から船に乗り、父のいる常陸国に向けて旅立ちました。



図1 善正寺（臼杵市大字二王座）

大坂までは海路で京都の西本願寺を目指しました。西本願寺では旅の安全と父との再会祈願のためには一人600文かかりました。姉は旅衣を売って一人分の祈願をしようとしたところ、見ず知らずの人が600文を差し出してくれたので、姉妹で祈願することができました。

京都からは袖乞いをしながら江戸を目指しました。何度も危険な目にあいながらも、その都度親切な人との出会いがあり、難所の大井川を渡り、箱根の関所を通過して関東に入ると、藤沢で同じ豊後国の臼杵藩士稲葉重置と出会い、江戸の臼杵藩邸へと共に向かいました。

9月29日、臼杵藩江戸藩邸に着いた姉妹は、留守居役の平生左助にこれまでの事情を話すと、左助は姉妹に同情し、青蓮寺に宛ててこれまでの厚き介護に感謝を述べ、姉妹の願いが叶うよう面倒を見ていただきたい旨の手紙をしたためました。そして、10月2日に姉妹はこの手紙を持って江戸を出発しました。その後の道中でも、何度も人々の親切に助けられながら、ついに10月9日夕方、姉妹は青蓮寺に到着し、父との7年ぶりの再会を果たすことが出来ました。



図2 青蓮寺（常陸太田市東連地町）

その後、姉妹は父がこれまで世話になった村人たちの家を一軒一軒お礼のあいさつにまわり、4・5日後にはその数は50軒にも及ぶ一方、姉妹の孝心に心を打たれ、食べ物やお金を

青蓮寺に届ける者も少なくありませんでした。そのような中、証吟らは奉行所へ届けをすることにしました。他の国の者を長い間無届けで滞在させていたことで、処罰を受けることも覚悟しましたが、姉妹の訴えに奉行所も届出の遅れを責めるどころか、二人の行いに感動し、今後の滞在を認め、その間の食料や燃料などの支援もしてくれることになりました。

年が明けると、姉妹が豊後国に戻る日が近づいてきました。暖かくなった2月9日、親子三人は、証吟をはじめ村の人たちに見送られて青蓮寺を出発しました。途中で枕石寺に寄ると、住職の西天から木の箱を手渡されました。その中には姉妹に贈る和歌や俳句が書かれた短冊などが入っていました。こうして常陸国を出発した三人は、臼杵藩から派遣された付き人とともに、2月13日に江戸の臼杵藩邸に着きました。ここで、三人は寒い時期を避けるために3月4日まで滞在し、3月5日に二人の付き人とともに三人は江戸を立ちました。帰りは往路とは比べものにならないほど順調に進み、4月6日に多くの人たちに出迎えられて臼杵に無事に着きました。三人は奉行所を訪れ、これまでのことを報告すると、当座の食料として米8升が与えられ、臼杵藩からは3石分の無税の土地が与えられました。

その後、初衛門は郷医の治療を受け回復しましたが、文政2年(1819)に56歳で亡くなりました。姉のつゆは、夫の直八の元に戻って家族のために精一杯尽くしましたが、子供に恵まれないまま天保8年(1837)に48歳で亡くなりました。妹のときは帰国して間もなく結婚しましたが、5年後の文化14年(1817)に25歳で亡くなってしまいました。

豊後では二孝女の物語を顕彰する取組みが行われ、明治になると姉妹を顕彰する記念碑が建てられたほか、地元の川登小学校では校歌にも歌われるとともに、校舎の壁には二孝女を題材とした^{なまづえ}鍍絵が描かれ、姉妹の孝行物語は長く伝えられてきましたが、常陸ではいつの間にか忘れ去られてしまいました。



図3 川登小学校(臼杵市野津町)の鍍絵

平成17年(2005)、水戸藩の編年書である『水戸紀年』八の文化8年辛未の項11月に「今月豊後大野郡川登郷泊村農民八衛門ト云モノ九年前二十四輩詣ニ出テ七年前五月廿二日東連寺村照蓮寺ニ至ル時ニ病テ歩スルコトヲ得ス既ニ七年ナリ八衛門女二人アリ姉二十一歳妹十六歳共ニ父ヲ尋テ今月七日東連寺ニ来テ初テ父ヲ見ルコトヲ得タリ路程三百五十里千辛萬苦云ヘカラス父子相見テ或喜ヒ或ハ泣至孝人ヲシテ感セシム・・・」(原本のまま引用)という記述をもとに青蓮寺の調査を行ったところ、二孝女に関する書簡17点などの資料が確認されました。これらの資料は「豊後国の二孝女研究会」によって調査研究され、翌年に『豊後国の二孝女』として刊行されました。地元では「二孝女顕彰会」が発足し、平成22年9月には書簡17点が常陸太田市指定文化財に指定されました。

親子の再会から200年を経た平成23年、臼杵市の「きっちよむ史談会」が常陸太田市を訪問し、翌年には常陸太田市二孝女訪問団が臼杵市を訪問し、両市の間には「交流促進協定」・「災害時の相互援助協定」が結ばれるとともに、お互いの地元である臼杵市立川登小学校と常陸太田市立山田小学校の交流へと広がりました。そして、平成27年10月10日には、この二孝女の物語を縁として、臼杵市と常陸太田市は両市の絆をより一層深め両市民の友好関係及び両市の市勢をさらに発展させることをめざし「姉妹都市交流に関する提携」を締結しました。

(常陸太田市文化課)

報告 2



フィールドワークを通じた 地域の歴史学習の取組

茨城県立牛久高等学校の皆さん

はじめに

皆さん、こんにちは。私たち牛久高校2年生は、「フィールドワークを通じた地域の歴史学習の取組」と題し、日本史Bの授業の一環で取り組んだ地域の歴史調査や、歴史新聞の作成について紹介します。教科書にある歴史だけでなく、フィールドワークを通じて、身近な地域の歴史を知ろうという目標のもと、夏休み中に実際に出かけたり、調べたりして出来上がった作品を、夏休み明けに生徒同士で互いに評価し合い、様々な作品に触れることができました。今回は、特に評価の高かった歴史新聞の内容を踏まえ、演劇部員の寸劇を交えながら、2学年の生徒が、水戸街道全体と4つの地域の紹介をしますので、よろしくお願いいたします。（司会：安田彩乃）



図1 歴史新聞発表の様子

○発表1：水戸街道について

水戸街道について紹介します。牛久高校2年の藏野菜々と岡野優雅です。よろしくお願いいたします。

こちらの写真は、牛久市内を通る旧水戸街道の様子です(図2)。現在も現役の道路として活躍する水戸街道についてお話しします。水戸街道は、江戸時代に定められた、江戸と水戸をつないだ重要な街道です。江戸と水戸の間には、18もの宿場町が設けられました。現在は旧街道として残り、または国道6号線として今も東京と水戸を結ぶ重要な道となっています。

東北地方の大名も参勤交代で水戸街道を利用した



図2 牛久市を通る旧水戸街道

ことがあり、各地にある宿場町が道中の重要拠点としてにぎわいました。そんな水戸街道を題材にした作品と言えば、『超高速！参勤交代』が話題となりました。あらすじは、「貧乏な湯長谷藩（現・福島県いわき市）が江戸幕府の老中に謂れない文句をつけられ、弁明のため5日以内に参勤交代をするよう無理難題をふっかけられ、何としてでも参勤するため考えた方法は…？」というものです。続編も作られましたが、実は2作品とも牛久が重要な場面で登場しています。

さて、今回の学習から、あらゆる歴史的な出来事が水戸街道に関連している、水戸街道と密接にかかわる各地の宿場町が、道中の拠点として非常に重宝されたことに改めて気づくことができました。そして何より、実際に現地に足を運べば、地形や町全体の雰囲気をも自分の目で感じることができる、資料館の人に話を聞いてみれば、より詳しい話が聞ける、ということも歴史を深く知る上では大切だと考えさせられましたし、今回のように新聞形式でまとめることで、見やすく分かりやすい内容で多くの人に伝える方法を考えるきっかけにもなりました（図3）。

この後は各地を調べた様子を紹介しますので、よろしくお願いいたします。

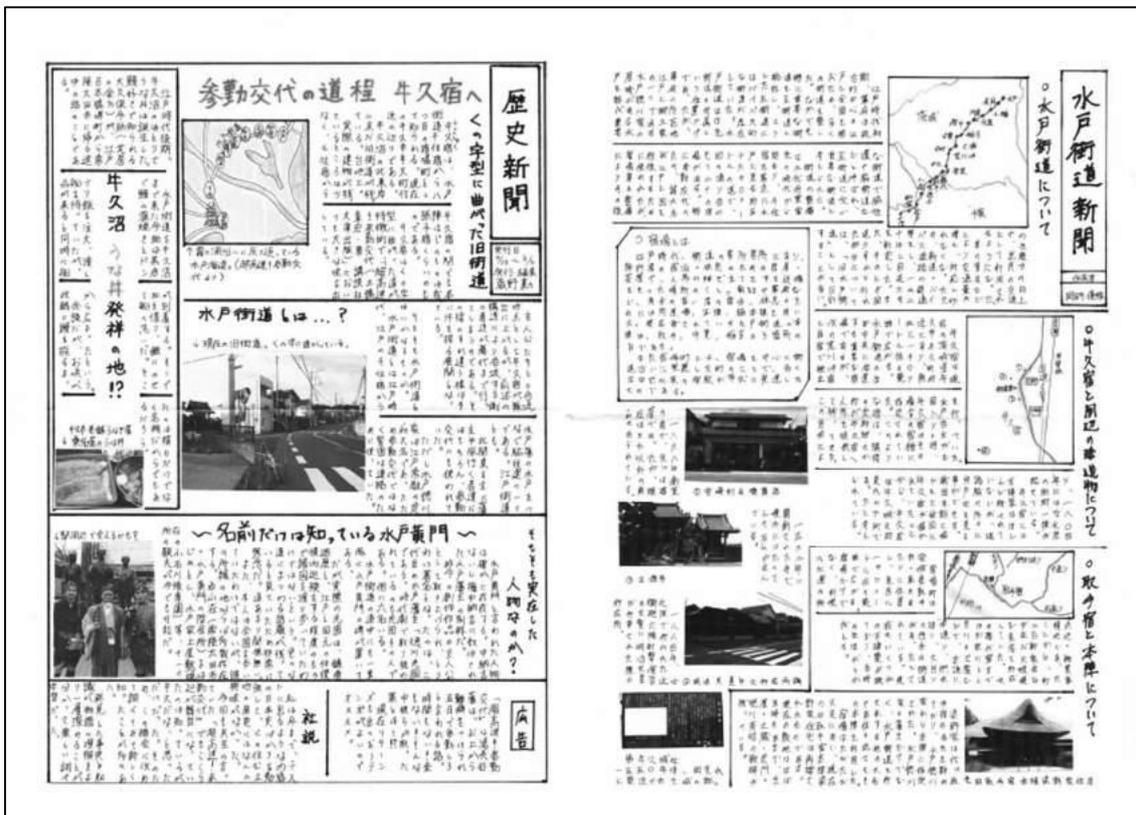


図3 歴史新聞の取組

～寸劇～

「さっき参勤交代について話が出てたけど、つい最近映画で見たよ。『超高速！参勤交代』。あんな感じで急に呼ばれると、大変だよな。」

「ちょっと待って。参勤交代って、お殿様が自分の領地と江戸を1年毎に往来すると決められているから、基本的にはあんな感じで急に呼び出されるってことはないんだよ。」

「え、そうだったの!？」

「ちなみに、水戸街道を使っていたお殿様は、多いときは20以上もいたのよ。」

「へー、たしかスピードはこんなゆっくりだった感じだった気が。」

「そうじゃないよ，実際にはもっと早く歩く感じ。」

「え，でも違う時代劇ではもっとゆったりしてなかったかな？」

「水戸から江戸まで100kmちょっとの道のりを3泊4日で移動したからね。さらに言うと、『下に，下に』というのも，すべてのお殿様の行列ではやってなかったみたいだよ。」

「ほんとに詳しいねえ。」

「まかせといて。」

「あー，何だか話してたら興味が湧いてきちゃった。水戸街道にどんな町があったのか，調べてみよう！」

(演者：原田亘，井上ゆうか)



では続いて，各地域の紹介です。私たちの通学圏である取手から土浦にかけて，4つの宿場とそこにちなんだ歴史について説明いたします。

○発表2：取手宿について

こんにちは。取手宿について紹介する伊藤みなみと佐藤祐希です。よろしくお願いします。

取手市は人口約10万8千人で，茨城県南部の玄関口となっている市です。東京から1時間以内のアクセスのため，ベッドタウンとなっています。そんな取手という地名の由来は，戦国時代に大鹿太郎左衛門おおしかたろうざの砦があったからと言われていています。地名の由来とされている大鹿城は，今では取手競輪場となっていますが，周囲よりも小高い地形から「お城があったんだろうなあ」と感じさせてくれます(図4)。今回，宿題で地元の歴史を調べるまで取手という地名の由来を考えたこともなかったので，とても興味深かったです。また，大鹿城近くの村の人たちが江戸時代に水戸街道が通るのに合わせて集団移転して取手宿が作られたことも，私たちにとっては新たな発見となりました。

さて，ここからは取手宿の様子を今に伝える「旧取手宿本陣」についてお話ししたいと思います。17世紀の終わりに取手宿の名主を務めた染野家の住宅が，水戸徳川家から本陣に指定されたことから，ここが取手宿における本陣となりました。水戸徳川家の当主や藩士だけではなく，水戸街道を行き来するほかの大名たちも，この染野家を利用したそうです。江戸時代の取手宿は度々火災に遭っていたようで，現在の建物は寛政7年(1795)に再建されたものとなっています(図5)。本陣の敷地が，現在まで残っており，当時の様子がうかがえます。現地の案内では江戸幕府最後の将軍である，徳川慶喜がここに立ち寄ったという話を聞きました。戊辰戦争で江戸城無血開城が決まった後，水戸で謹慎することになり江戸から水戸へ向かう途中，この本陣に立ち寄ったそうです。本来なら建物前に駕籠を乗り付けるところ，表門から駕籠を降り歩いて玄関へ向かったという言い伝えがあり，授業で習った有名な人物も訪れ

たことがあると知り、少し驚きました。なお、旧取手宿本陣染野家住宅は、毎週金・土・日曜日に内部が公開されており、取手駅から歩いて10分もかからない場所にありますので、歴史ある取手にお越しの際は、是非立ち寄ってみてください。



図4 取手の地名の由来となった大鹿城跡



図5 取手宿本陣として利用された染野家住宅

○発表3：若柴宿について

若柴宿について紹介します。牛久高校2年の斉藤理央と原田綾音です。よろしくお願いします。

私たちが住む龍ヶ崎市は、常磐線や国道6号線が少しかさるように通過しているので、龍ヶ崎市内に水戸街道の宿場があったのかと思えるかもしれません。しかし、市内にも若柴宿という宿場町が存在していました。若柴宿は、取手宿から藤代宿を通過して小貝川を越えた先にある、常陸国の入り口に当たる水戸街道7番目の宿場町です。隣の藤代宿と牛久宿との距離は、それぞれ4kmほどしか離れていないため、大名が泊る本陣はなかったようです。実際にどのような宿場だったかは、明治時代の大火事のため建物も史料も焼けてしまい残念ながら記録はあまり残されていません。また、現在の国道6号線が旧水戸街道から少し離れた牛久沼のすぐ東側を通るようになり、若柴宿が周囲の発展から取り残されてしまったように感じます。その代わりに、当時の面影を残しており、近くには牛久沼の由来となった伝説をもつ金龍寺、鰻を神の使いとする星宮神社など、古い歴史のあるお寺や神社があります(図6)。

若柴宿がある龍ヶ崎市には、今でも古くからある寺院、神社、城跡が残されています。その中の1つに女化おなぼけ神社があります(図7)。実はこの神社、周りすべて牛久市に囲まれている飛び地となっていますが、戦国時代に作られた歴史ある神社です。

そんな女化神社にまつわる民話を1つ紹介します。昔、ある村に忠五郎という若者がいました。忠五



図6 若柴宿の面影を偲ばせる街並み



図7 狐伝説が伝わる女化神社

郎が野原を通りかかると、猟師が白狐を撃とうとしていました。それを見た忠五郎は、哀れに思って白狐を助けました。その夜、忠五郎の家に若い娘が現れ、一晩泊めてやることにしました。一晩だけのはずが、娘は一生懸命に働き、やがて周りの勧めもあり2人は結婚し、1人の娘と2人の息子を授かり家族仲良く過ごしていました。しかし、うたた寝している母から尻尾が出ていることを息子が気づきました。母親が白狐であったことを子供に知られてしまい、正体を知られた女は「みどり子の母はと問はば女化の原に泣く泣く伏すと答へよ」という歌を書き残して、姿を消してしまいました。嘆き悲しんだ忠五郎は、妻が逃げていった野原に祠を建てました。これが今の女化神社になったと伝えられています。

このように、地域の歴史を自分自身で振り返り多くの方に紹介できたのは、貴重な機会となりました。ありがとうございました。

～寸劇～

「やっぱり、牛久市にあるものといったら牛久沼だよね。こうして名前がついていると、牛久市にあるって分かりやすくアピールできるよね。」

「何言ってるの。牛久沼は牛久市にはないんだよ。」

「え！？そうだったの！？」

「そうだよ。そもそも牛久沼の『牛久』というのには、伝説があるんだよ」

「何それ、てっきり牛久市にあると思ってたのに。」

「牛久沼というのは、さっき先輩が話してた、龍ヶ崎市の金龍寺の伝説に由来するの。このお寺にいた、大食いで怠け者だった小坊主が、罰が当たって牛になってしまったの。やがてこの牛が沼に身を投げて沈んでしまって、『牛喰う沼』から『牛久沼』になったといわれているの。」

「へー、やっぱり物知りだねえ。あー、なんか頭使ってたらお腹空いてきちゃった。牛久沼名物の鰻井食べたいなあ。」

「鰻井は、江戸時代後期に移動で急いでいた水戸藩士が生み出したとされているの。」

「なるほどね。よし、鰻井食べに行こう。」

「でもね、近くには鰻を食べちゃいけない地区があるの。」

「何それ、どういうことなの？あんなにおいしいのに？」

「さっき紹介された、若柴宿の星宮神社では、鰻が神様の使いなの。だから決して鰻を食べてはいけないとされているのよ。」

「隠れて食べちゃいそうだけどなあ。」

「昔、どうしても食べたくて食べた人が、崇られて寝込んだみたいなの。もともと、きっちり守っているのは高齢の人が多くて、若者だと地区の外で食べている人が多いみたいだけれどもね。」

「何だ、そうなんだ。でも、近くのこと知らないことって結構あるんだね。」

○発表4：牛久宿について

次に、牛久宿について紹介します。岩井優妃と宮本純也と清原一稀です。よろしくお願ひします。

牛久宿は、水戸街道8番目の宿場町で江戸時代後期の19世紀中頃には、旅籠や茶屋など合わせて124軒が連なっていました。宿場があった場所は、牛久市牛久町というJR牛久駅の南西方向に位置し、現在の国道6号線の西側を当時の街道が通っていました。宿場周辺の村々には、助郷という宿場の役割を維持するのに必要な人や馬などを提供する義務が課せられました。19世紀初めには、女化神社に集まった6千人の農民たちが一揆をおこしたほどの負担でした。現在牛久宿の面影を残す家並みは残っておら

ず、パッと見た感じだと普通の住宅街のようですが、明治時代に天皇が休憩された行在所の跡地に雰囲気を感じることができますし、街道近くには戦国時代や江戸時代に建てられたお寺も見ることができます。

点在する古いお寺の1つに得月院があり、牛久沼と関わりが深い河童を題材に作品を残した画家小川芋銭が眠っています(図8)。この小川芋銭や河童については、今回の新聞作成で取り上げた牛久在住の生徒が多かったこともあり、簡単に紹介します。

小川芋銭は、明治から昭和初期にかけて活躍した日本画家です。70年の生涯のうち、50年以上を牛久で過ごし、牛久沼のほとりで農業を営みながら創作活動に打ち込みました。特に河童の絵を数多く残したことから、「河童の芋銭」と親しまれています。最晩年を過ごした自宅兼アトリエは「雲魚亭」といい、亡くなる直前まで作品制作や作品集の刊行準備など多忙の日々を過ごしたそうです。現在は小川芋銭記念館として一般公開され、近くには河童の碑や、悪さをした河童を縛り付けたという「カップ松」もあります。雲魚亭や河童の碑がある場所は、江戸時代の牛久陣屋の跡地で、その東には戦国時代の牛久城の跡が残されています。

牛久城は戦国時代にこの地域を治めた岡見氏が築いたと伝えられています。この岡見氏の元々の城跡は、私たちの高校がある牛久市岡見町にありましたが、のちに牛久城に移り、小田原の北条氏に与したため、佐竹氏の軍勢とたびたび合戦がありました。かつては三方を牛久沼に囲まれた高台にあり、今でも土塁や堀跡を目にすることができます(図9)。生まれてから17年、牛久市に住んでいながら今まで知らなかった地元のことが多かったと、今回の学習で気づきました。しかし調べてみたことで興味深いことを発見したり、歴史あふれるところがたくさんあるということが分かったりしたので、良い経験になったと思いました。

○発表5：土浦宿について

最後に、土浦宿について紹介します。栗原拓也と遠藤百華です。よろしくお願いします。

土浦宿は、水戸街道11番目の宿場町です。当時は街道1.2kmにわたって本陣、旅籠や商店などが隙間なく立ち並んでおり、霞ヶ浦の水運を利用した江戸送り醤油を中心とした商業も栄えていました。今でも当時を偲ばせてくれる建物が旧街道沿いに残されていて、観光で訪れた人たちの休憩施設としても活用されています(図10)。



図8 小川芋銭の墓



図9 牛久城跡



図10 土浦宿の街並み

土浦は宿場町であるだけでなく、城下町でもありました。旧街道の近くには亀城公園の名で市民に親しまれている、土浦城の跡が残っています（図11）。土浦城は、戦国時代に周辺の大名の争いの場となりました。江戸時代になると、老中を務めた土屋氏が主に支配していました。土浦城は平城でしたが、幾重にもめぐらされた濠で固められた水城でもあり、水に浮かぶ亀の甲羅に見えたことから別名「亀城」とも呼ばれています。城下町は城を中心に武家屋敷で囲まれ、城の東側には水戸街道が通って町屋が立ち並んでいました。濠、石垣、土塁のほかにも、門や櫓が残されており、特に櫓門は本丸にあるものとしては関東地方唯一のもので、貴重な遺構だといわれています。



図11 土浦城跡

亀城公園の隣には、土浦の歴史を学ぶことができる土浦市立博物館があります。古代から現代までの土浦の歴史について展示されていて、土浦城の模型はとても目を引きまします。また、若い女性に何かと話題の刀剣も展示されています。私自身が新聞作成のため訪れた時には、夏季展示が開催されていて、土浦で見つかった和同開珎や中世に描かれた釈迦涅槃図といった、普段展示されていない資料を見ることができました。博物館を訪れ、新聞にまとめていく中で、自分の暮らしている市が、様々な歴史の上に成り立っているのだなと改めて実感しました。そして、地域の方々とお話ししてみて、自分の知らないことがまだまだたくさんあることにも気づかされ、もっと色々知りたいと思うようになりました。

～寸劇～

「俺は牛久市に住んでいるけど、地元の歴史で知らないことって結構たくさんあるんだね。」

「私も、先輩たちの話を聞いて本当に勉強になったよ。」

「地元のことをもっと深く知ることで、牛久市、いや茨城の魅力をもっと紹介して、俺の力でランキングを1つでもあげられるといいよね！！」

「あらあら、夢は大きいね。とにかく、多くのことを学べてよかったね。これからも頑張っていこう。」

「そうだね。今日はいろいろ教えてくれてありがとう。」

「どういたしまして。」

おわりに

今回の学習活動を通じて、地元自治体の専門の方からもアドバイスをいただきながら、今まで気づかなかった地域の歴史を深く学び、魅力に気づくことができました。そして、地元の方とのふれあい、多くの方へ伝える大切さも考えることができました。今回の経験を今後の歴史学習にも活かせればという思いとともに、私たちの発表を終わりにします。

皆様、ご清聴ありがとうございました。



桜川市歴史ウォーキングの実践 —茨城県歴史の道調査事業の成果を活用して—

桜川市教育委員会
宇留野 主税

1. はじめに

皆さん、こんにちは。桜川市教育委員会生涯学習課の宇留野と申します。よろしくお願ひいたします。本日は、歴史ウォーキングの実践のお話ということで、桜川市、こちら茨城県でも筑波山の北側の市になりますけれども、合計7回くらい歴史ウォーキングを行っています。そちらの例でご参考になればということで、お話ししたいと思います。

はじめに2つのお話ということで、調査と活用のお話をいたします。桜川市には小栗道という、奈良時代から現在まで使われているという非常に特殊な古い道が残っております。また、小栗道の調査中に鎌倉街道が見つかりまして、そちらの調査も併せて行っております。

図1は、桜川市の真壁伝承館歴史資料館の第3回企画展として開催しました「歴史の道 鎌倉街道と小栗道」です。地元の方から大変評判が良く、すごい道があるんだとか、是非歩いてみたいというお声を今も非常に多くいただきます。歴史の道の調査について最初お話があった時は、地味だけど将来につなげられるように頑張ろうぐらいに思っていたのですが、蓋を開けてみますと今までにないぐらい人気がある展示・講座になりました。

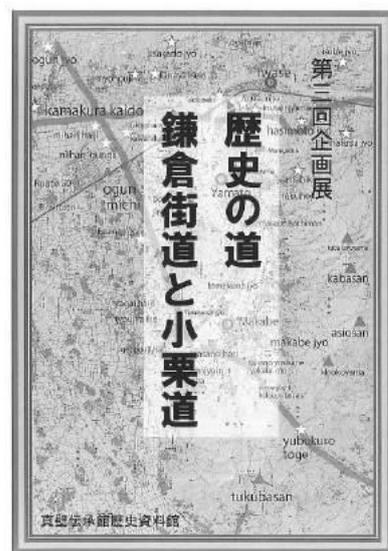


図1 企画展「歴史の道
鎌倉街道と小栗道」

2. 小栗道^{おぐりみち}

まず小栗道についてですが、これは古代の郡役所をつなぐ官道です。道のすぐ横にある遺跡から、今から1300年前の奈良時代ぐらいまで遡ると考えられます。中世には中世真壁城と小栗城を繋ぐ戦の道、それから道の周辺には経済圏が形成され、裕福な商人がいたことが古文書で分かることから、経済の道であったということもあります。江戸時代の道としても、道標がありまして明治まで使われています。1300年もの間ずっと使われているという、とんでもないものがあるなあというのが、最初知った時の感想です。

皆さんの資料に、小栗道のルートについて示しました(図2)。右側に、道沿いに分布する遺跡や道標について、番号を振って示してあります。現在の道ですと大体東西南北に縦横に伸びたりしますが、見ていただくと分かるように斜めに地域を貫く道でして、まるでショートカットを目指すように一直線に伸びています。

1. 小栗城跡 寺山通跡 内外大神宮
2. 新治廃寺
3. 新治郡衙
4. 上野原 瓦葺跡
5. 真像寺 道標 (宝永4年)
6. 莫大沼
7. 上谷貝 鹿島神社
8. 字市場
9. 字古館
10. 道標 (正徳4年)
11. 字熊野
12. 谷貝廃寺 (白雲部高の) 長者池
13. 字白
14. 瑞世城跡 中近世の 土器生産地
15. 源法寺 鹿寺
16. 伊佐々橋 跡・市の町
17. 達上院跡 山田鹿城の坊
18. 日月庵寺 稲石山
19. 平良兼館跡
20. 真壁城跡
21. 北田道跡
22. 山口 虚空蔵菩薩 平安時代仏像
23. 山尾 権現山廃寺 富士根遺跡
24. 湯袋峠



小栗道は筑西市小栗から桜川市真壁町の湯袋峠へと延びる直線的な路線の古道です。上空から地形を見ると、真壁台地の谷地形を見事によけつつ、直線的な路線を維持しており、かなり正確な地形測量のもとで、直線路を設計したようです。これまでの研究で、大規模な地域開発計画のもとで作られた古代伝路（郡衙・国府をつなぐ情報伝達の官道）と推定されています（中村1997、木本1997）。所々にみられる道路の屈曲部から、時代とともに浸食が進む谷を避け、中世以後の城館、寺院、道路、集落等の新設で、本来は直線路であった路線の部分変更が行われたことがうかがえます。小栗道を詳しく記した古文書は発見されていませんが、筑西市古郡・新治郡南、下谷貝長者池付近の白壁郡衙推定地、古代寺院跡、中世の城館や墓域などの遺跡の存在や、江戸時代の道標も確認できることから、この道が奈良時代から江戸時代の筑波山麓北西部における重要道であると思われます。桜川市に關係する資料には、小栗道を記さなくとも、周辺地名から道沿いの土地利用状況をつかうことができる古文書や、興味深い伝承が残されています。その内容から、小栗道は古代以来の幹線道路であり、中世に蓄財が盛んな富を生む道として人の往来や商工業も盛んだったと想像できます。古道調査は途中ですが、ここでは小栗道を知るための重要地点の位置、情報と写真を紹介します。なお、遺跡出土品、重要地点の情報・写真については、8pと10pをあわせてご覧ください。

富有人の拠点（富を生む幹線道路、小栗道）
 永享7年（1435）の『常陸国富有人注文』（『常陸国中富有人等人数注文』）『常陸国富有人注文』所収）では、谷貝の教祐入道、瑞世の正員入道父子、唐日妙全入道、山田の慶城坊が記され、小栗道沿いに住み、財力を持った「富裕人」の存在が確認できます。

土器の大量生産地（瑞世・源法寺の土器職人）
 瑞世と源法寺は江戸時代の土器生産地で、土器職人30人が知られます（元禄十年『瑞世村指出版』『真壁町史料近世編1』1985）。さらに関係文書から、土器生産は中世にさかのぼる可能性もあり、小栗道沿いに土器生産の工業地帯があったようです。壊れやすい土器（かわらけ、土鍋等）を大量生産・消費するのは、儀礼的な場の道具であるとともに、中世武家や富裕な都市市民の間で定着した、壊れやすいもので無駄遣いするという一種の贅沢な行為でした。土器の大量生産や消費は、中世の豊かさの象徴だったのです。

道国雑記と小栗道
 『道国雑記』（『群書類従』紀行部所収）は文明18年（1486）年に天台宗の僧・道興が記した東国巡歴の紀行文です。道興は京都の聖護院門跡や熊野三山検校などを歴任した有名な人物で、東国の旅は漢詩や連歌等を詠みながらめぐり、天台系修験組織（本山派）の熊野信仰総括者という立場から、熊野社などの寺社を訪れています。道興は日光・宇都宮から小栗の熊野社を訪れ、桜川を渡って、熊野先達「山田鹿城といえる山伏の坊」（推定地・東山田達上院跡付近）に逗留後、筑波山登山を果たし、「いささの橋」を渡って下谷方面へと向かいます。この行程を直線と結ぶ最短距離が小栗道です。道沿いに上谷貝字熊宮、下谷貝字熊野、同熊の山、地熊字熊の宮が熊野信仰を伝え、桜川付近に宇「伊佐々橋」、筑波山道や山田達上院も近い位置にあります。そして、小栗から伊佐々橋までの行程は、さながら筑波山をランドマークに一直線に目指すように進む点も小栗道の特徴です。こうした状況から道興の常陸の旅は、小栗道を通過した可能性が高いと考えられます。

長者池の伝説
 長者池付近には、これまでの研究から白壁（真壁）郡衙、古代官道、中世の『常陸国富有人注文』記載の谷貝の富裕人、古代集落遺跡等の存在が想定されています。谷貝地区にはそれらを暗示するかのよう、興味深い伝説があります（枝久夫『真壁町の民話』1995）。伝説は谷貝の歌人で郷土史調査に尽力された故・藤田祐四郎氏「谷貝の歴史調査ノート」を参考にしており、史料の少ない谷貝地区では貴重な参考資料です。
<長者池昔ばなし（要約）>
 ●長者池付近には多くの使用人を使った駅路長者が生活していた。道は小栗新治から筑波の主要な幹線道路で、運送業のような仕事で莫大な財宝を得た長者は没落し、庭園の池のみが長者池として残った。
 ●長者屋敷を囲むように数百軒の大集落があり、旅人の宿屋、女郎屋が軒をならべ、市が立って栄えた。
 ●戦前、長者池北の小松山開墾の際、広大な遺跡と布目瓦がたくさん発見された。瓦を拾うと病気になると言われた。

上谷貝字市場の伝承（藤田氏の歴史調査ノート・要約）
 藤田祐四郎「ノート調査記録『真壁町史料 文芸編1』1995
 数百年前の市場付近は上谷貝村の本通りでした。三、四百軒の宿場が年々市が立ちましたが石地蔵尊と十九夜観音などの石造仏を築いて畑となりました。

道でつながる人、モノ、宗教 真像の寺と三村山系瓦
 真像は推尾出身とされる鎌倉時代の僧。浄土真宗を開き常陸で布教した観賢の弟子で、金敷・真像寺は真像開基の寺です。後に高田尊修等二代目の住持となりました。推尾、金敷、高田は小栗道に近い集落。小栗道は真像が歩んだ道かもしれません。一方、考古学の成果では、推尾薬王院、小栗寺山道跡、川澄くまどう遺跡等で、つくば市・三村山樞梁寺と同系の瓦が出土しています。樞梁寺は鎌倉時代の律宗僧・忍性が布教に務めた寺で、瓦の分布から樞梁寺や律宗系寺院勢力の影響がうかがえます。鎌倉時代の小栗道は人、モノ、宗教をつなぐ地域の動脈だった可能性があります。

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製しました（承認番号 平24情復 第483号）。本書の地図を複製使用する際は、国土地理院長の承認が必要な場合があります。詳細は国土地理院HP等でご確認ください。

図2 小栗道の経路

この道を活用するにあたって、こういったポイントが良いのかなと考えてみました。これまでの皆様の発表の中では、周辺の文化財ということがありました。この小栗道に関しては道自体の作り方が素晴らしいのではないかと考えまして、小栗道のココがすごいという3点を挙げてみました。

まず、筑波山を目指して一直線に作っていることがあります(図3)。これは現在の景色ですね。こういった形で真ん中の畑の中に道が残っています。それから、直線の道にする。これはくねくねと曲がらないので分かりやすいということがあると思います。最後が、低い所は通らないという点です。これは管理上の問題になると思いますが、低い所を通りますと、水が溜まって土がグチャグチャになり、壊れやすく管理がしにくい。なるべく手がかからないようにしてあるということです。実際に地形図を見てみると、小栗道が上手に低地の入り江状に谷が入っているところを抜けながら一直線に作っているということで、よく上記の条件をよくクリアしているということが分かると思います(図4)。奈良時代の当時は地形図をまず作って、直線的に、しかも低地を通らずにどうやって道を作るかということ、当時の技術者がうまく考えたのではないかなと思います。

この道沿いには奈良時代の^{にいほりぐん}新治郡の役所があり、筑波山の反対側である常陸国府(石岡市)へと続く、つまり地元の人以外にも当時の役人が中央から地方へ行き来していました。筑波山周辺を知らない人がこの道を歩くこともあるわけですから、そういった意味で非常に分かりやすく作られているなあというのがこの小栗道の特徴です。ちなみにこの場所は今畑になっておりますが、「いちば」という地名になっておりまして、時代は分かりませんがかつて市場があったであろうというような場所になっております。

3. ^{かまくらかいどう}鎌倉街道

次は鎌倉街道のお話です。こちらは途中から調査を始めたのですが、鎌倉へ通じる道、結城市や小山市の方を目指している道と分かりました。それから、中世の道ということも遺跡などから分かりました。馬で走る、おそらく高速道路みたいなものだろうと考えています。こちらが鎌倉街道の道筋です(図5)。それから少し見づらいますが、破線になって山の上へ登っていく道や、南の方へ延びていくような道もあります。全く状況が分からなかった状態から、地道に調査をしていくと見事に成果が出たということ



図3 筑波山へ向かって伸びる小栗道

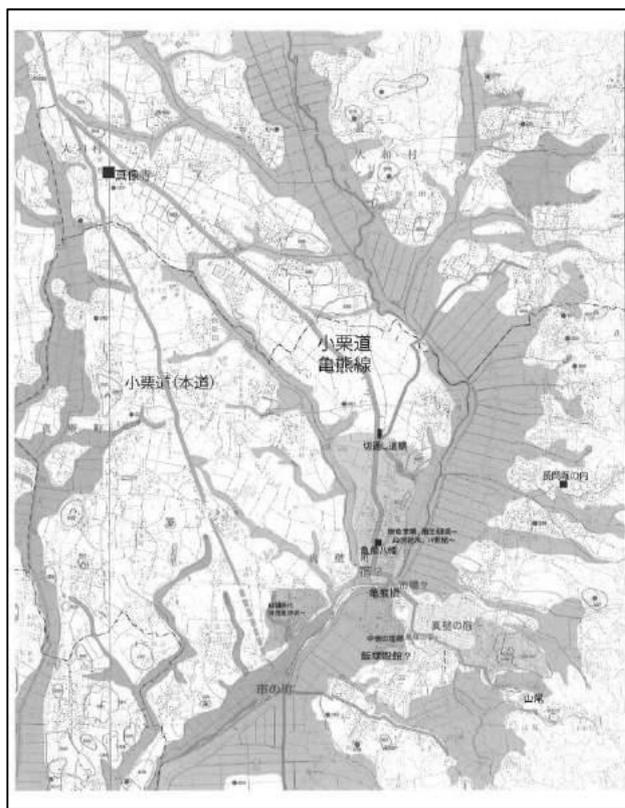
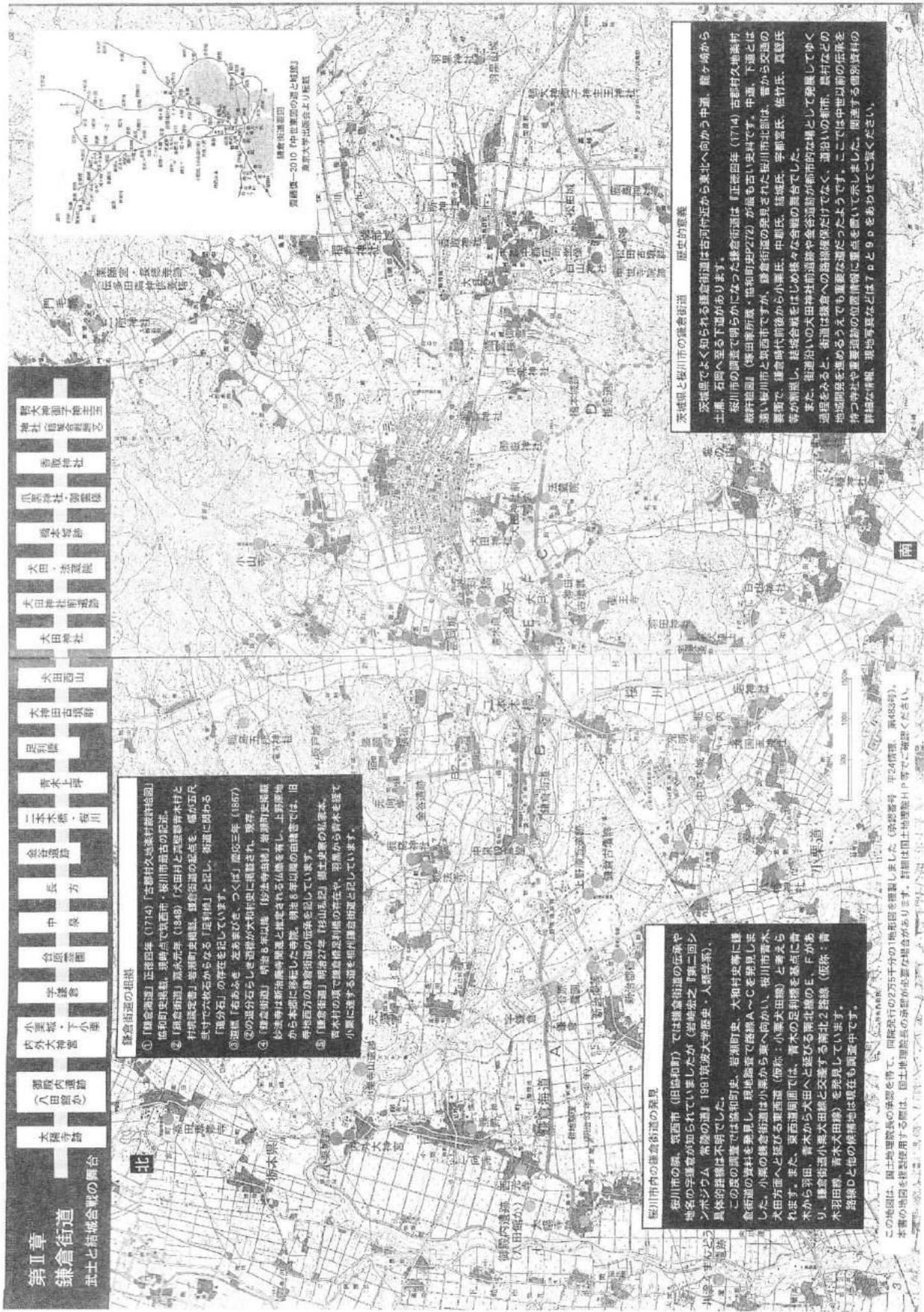


図4 小栗道周辺の地形



- 第二章 鎌倉街道 武士と結核合戦の舞台
- 大田神社
 - 大田山
 - 大田山古墳群
 - 民権館
 - 青木寺
 - 二本松、袴川
 - 金造屋敷
 - 長方
 - 中泉
 - 会原番
 - 茅葺倉
 - 小栗塚、下小栗
 - 内外大神宮
 - 瀬原内蔵助 (山田徳丸)

鎌倉街道の概観

- ①「鎌倉街道」正徳四年(1714)「古郡村久地家村社神祇園」徳和町史掲載。現時点で筑西市、松川町最古の記載。
- ②「鎌倉街道」高永元亨(1846)「大田山と河原野村と村境の遺蹟」等河野幸輔編、鎌倉街道の起点を、幅が五尺、寸寸で六枚石からなる「互利橋」と記し、街道に附ける「薄分石」の存在を記しています。
- ③逆風「石あふも、定あま心を、つくく」歴保三年(1867)
- ④の足分石らしき遺跡が大田山史に掲載され、現存。
- ⑤「鎌倉街道」明治も年以後、妙法寺遺跡「岩瀬町史」掲載。妙法寺は新治藩寺と鎌倉街道と集まる弘法を看し、上野原地から本願に移転した寺院。明治も年以後の由緒書では、旧寺地西方の鎌倉街道の遺跡を記しています。
- ⑥「鎌倉街道」明治27年「杉山日記」御土庫家の私家本。青木村の境で鎌倉街道利権の存在や、羽黒から新水を経て小栗に達する道を信州鎌倉街道と記しています。

松川市内の鎌倉街道の発見

松川市の駅、筑西市(旧松和町)では鎌倉街道の広さや地名の字連が知られていましたが《岩崎宏之『第二回シムンボジウム 高松の道』1991筑波大学歴史・人類学系》、川原 幸也『松川市史』1997筑波大学出版会、2007筑波大学出版会)の調査では松和町史、岩瀬町史、大和村史等に鎌倉街道の資料を調査し、現地調査で段跡A～Cを発見しました。小栗の鎌倉街道は小栗から東へ向かい、松川市青木、大田方面へと延びる東西道(仮称:小栗大田線)と青木から大田方面へと延びる南北道(仮称:青木の足利橋を基点に青木から羽田、青木から大田へと延びる南北線のE、Fがあり、鎌倉街道小栗大田線と交差する南北2路線(仮称:青木羽田線、青木大田線)を発見しています。路線Dと他の候補地は現在も調査中です。

茨城県と松川市の鎌倉街道 歴史的経緯

茨城県でよく知られる鎌倉街道は古河付近から東北へ向かう中通、龍ヶ崎から土浦、石原へ至る下道があります。松川市の調査で明らかになった鎌倉街道は「正徳四年(1714)古郡村久地家村社神祇園」(塚田家所蔵、松和町史P27)が最も古い史料です。中通、下通とは古い松川市と筑西市ですが、鎌倉街道の発見された松川市北部は、昔から交通の要所で、鎌倉時代前後から小栗庄、中畑氏、鎌倉氏、宇部宮氏、佐竹氏、真壁氏等が割拠し、結核合戦をはじめ様々な合戦の舞台でした。また、街道沿いの大田山神社前遺跡や金谷遺跡が都市的な場として発展してゆく過程をみると、街道は鎌倉時代前後の築城だけでなく、道沿いの市街、農村などの地域開発を進めるうえで重要な道だったようです。ここでは中世以前の伝承を持つ形式や重要施設の位置情報に重点を置いて示しました。関連する個別資料の詳細な情報、現地写真などはpと9pを合わせてご覧ください。

この地図は、国土地理院の地図を得て、同院発行の2万5千分の1地図を複製しました(筑波大学 平成43年)。本書の地図を複製使用する際は、国土地理院長の承認が必要となります。詳細は国土地理院HP等でご確認ください。

図5 鎌倉街道の経路

で、いい調査ができたなと思います。

鎌倉街道の史料になりますが、まず江戸時代の絵図が残っておりまして、街道の「街」が「海」になっていますが、どこが鎌倉街道なのかが分かりました(図6)。この道沿いにも様々な文化財が周辺に並んでくるということで、それらの年代からするとおそらく平安時代末期にはできていたのではないかと思います。また、ちょうどこの調査中に古文書を発見することができまして、「犬田村、青木村村境議定書」という、江戸時代の終わりのころの史料になります(図7)。村境の水路や道路などの管理の取り決めを村境でやっていて、「足利橋」という中世にありそうな橋の名前と「鎌倉街道」と書いてあります。意味は、境界杭のところを基準にして1番目から3番目の杭の間、その道路を昔から鎌倉街道と呼ぶということが書いてあります。この道は具体的にどこかということですが、実際に今も現地に残っており、ちょうど道の分岐点になって足利橋という橋も残っています。足利氏が休んだと伝えられる橋で、それらしい人物は後ほどご紹介します。古文書に書いてある景観が、実は今も残っているということで非常に貴重な場所になります。こちらを案内しますと、皆さん凄い感動します。

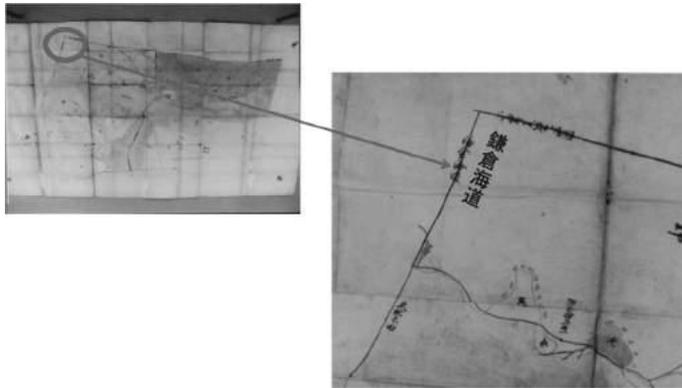


図6 絵図に示された鎌倉街道

(正徳4年(1714)古郡村久地楽村裁許絵図)



図7 「犬田村、青木村村境議定書」

4. 活用

鎌倉街道を実際に歩いたシーンも紹介したいと思います。こちら大和地区にあります白山神社です(図8)。実はこの日、足の不自由な方が参加されました。その時は真夏7月の会だったのですが、足が不自由だけれども鎌倉街道というすごい道があるんだから是非歩きたい、みんなに迷惑かけるけど是非歩かせてくれということで来られました。そこまで思ってもらえるものなのかと逆に私が感動してしまいました。このように、地元の人々の反応がすごいということが特徴になっています。今、真壁城という国指定史跡の整備を担当して、発掘調査や復元を行っているんですけども、正直鎌倉街道の方が人気が高いのがちょっと悔しいところです。



図8 鎌倉街道ウォーキングの様子(白山神社)

鎌倉街道の活用ですけれども、「駅から1分鎌倉街道、JR水戸線岩瀬駅・羽黒駅すぐそば」という、不動産の売り文句みたいですが、事実この通りでして、駅前に鎌倉街道がそっくりそのまま残っております。ちょうどその場所が地境になっていて、土地の境目に道路を通したためです。アップダウンも少なくウォーキングに最適な道になっています。

道についてはストーリーがいくつかありますので、ご紹介したいと思います。この鎌倉街道のところには市神様が残っております(図9)。この市神様の話をすると、地元の方はそう言えば昔こんなことがあったと、どんどん思い出していくんですね。あまりに多すぎてメモを取り切れないほどになるんですが、そういう昔のことを思い出させる。ここで確かに昔市場やっていたとか、記憶を呼び起こさせる場所でした。この方たちは70歳近い方が多いんですが、それぞれの小さい頃のストーリー、物語を思い出す場所になっております。

もう1つのストーリーを挙げたいと思います。これは室町時代の話なんですけれども、実はこの桜川市の鎌倉街道沿いは結城合戦という大きな戦いの痕跡が残っております。街道沿いの城跡に橋本城跡というのがありまして、戦いの旗揚げ地と言われております。主人公の名前は足利安王丸やすおうまる、それから足利春王丸はるおうまるといい、今でいうと中学1年生、小学6年生くらいの二人の少年とその家臣たち2万人が、この橋本城跡というところで挙兵して結城城に集結して戦ったということです。その敵方である室町幕府は10万の大軍、両者で約1年間も戦い続けました。そういったことの始まりがこの桜川市の鎌倉街道沿いの城跡であったという話をした後だと、見方が変わってくるのではと思います。

これが橋本城跡で、真ん中の山全体がお城になっております(図10)。実際に歩いてみますと非常によく残った城跡です。先ほどのようなストーリーを調べた後ですと感慨深いといえますか、ここに少年二人が立て籠もって、結城まで鎌倉街道を走って行ったのかとそういうような想像ができます。今までただの山だったのが全然違う山に見える、そういうことが参加者の感想でよく聞かれました。今まで見て来た景色が本当に一変するというのが歴史の道の大きな魅力になると思います。

現在調査中の案件ということでもう1つ挙げたいと思います。犬田神社という神社があります(図11)。こちらは橋本城跡の近くなんですが、なぜかヤマトタケルとか平将門、源義家といった当時の英雄たち



図9 鎌倉街道ウォーキングの様子(市神様)



図10 橋本城跡



図11 犬田神社

がみんなこの神社と関係しているということで、なぜそんなことが起きているのか？というのが今調査中の案件です。ですから、桜川市では調査事業自体はいったん終えたわけですが、その後もずっと調査を続けて情報を積み重ねて活用したいと考えています。

最後に今調べていることということで、2つの小栗道というものがあります。最初のお話で見た小栗道は、経済的な道だというお話をしました。実はこの道のずっと北の方に行くと分岐点がありましてそこから別の道が伸びています（図12）。亀熊城という城を通して真壁城の城下町に入っています。これは何だろうということで、おそらく真壁城の城下町誕生の秘密なんじゃないかと思っております。小栗道の経済力が欲しかった、それで城下町を發展させたかったのではと考えております。写真では「小栗道奈良時代」のところともう1つの印をつけた「小栗道亀熊線」と書いてありますが、これが中世の道です。間に筑波山がありまして、先ほど筑波山を目指すはずだった小栗道がここでは間に入っております、どっちに行けばいいんだということになるんですが、現地に行きますと行きやすいのは亀熊線の方です。すんなりと小栗の方から筑波山を目指そうと思うと実は中世の道の方に誘導されてしまう。それで先ほどの亀熊という、真壁城の前の殿様がいたとされている方へ誘導されて、最終的には真壁城の城下町に入ってしまうというような道です。そういう地域の変遷、地域を作るための道の動きと言いますか、道の役割が重要だったと考えています。そういった意味でも歴史の道の調査というのは、地域全体の成り立ちを考える大きなヒントになるのではないかと思います。さきほどの小栗道亀熊線は飯塚宿という、真壁城跡に関連する城下町で最初に出てくる場所に達しており、やがて真壁城の城下町の起点となる飯塚宿に小栗道の富、経済を誘導しているようです。真壁城の調査もしておりますけども、歴史の道調査によって、城下町の成り立ちまで考えられるようになってきました。



図12 2つの小栗道

5. おわりに

まとめたいと思いますが、歴史の道を活用するにはどういったポイントがあるのか。すごい所を探そう、それからストーリーを探そうということで、市役所の職員としてお客様と一緒に歩いていますと、この2つがやっぱり知りたい、面白いと思います。ですからその点をこれから活用のポイントにしたいと考えております。最後になりますけれども、今後も桜川市ではまだ色々な歴史ウォーキング計画中ということで、面白い企画を用意しておりますのでぜひよろしくお願いいたします。

○宇留野 主税（うるの ちから）

桜川市教育委員会 生涯学習課副主査。

研究分野は日本考古学。主に、中世城館、中世都市、古道の研究を行う。近年の論文（著書）には、「堀・堀内障壁〔障子堀〕」（『中世城館の考古学』高志書院 2014）、「中世都市の開発と塚」（『アーキオクレイオ』11号 東京学芸大学 2014）、「7 筑西市・桜川市の鎌倉街道」「9『廻国雑記』の道-小栗道-」（『茨城県歴史の道調査事業報告書中世編』、茨城県教育委員会 2015）、「7 真壁郡・新治郡の伝路」「8 下総国猿島郡・結城郡の道」（『茨城県歴史の道調査事業報告書古代編』、茨城県教育委員会 2015）などがある。



徳川ミュージアムの取組

徳川ミュージアム学芸員

渡邊 光恵

1. はじめに

徳川ミュージアム学芸員の渡邊と申します。本日は、当館の取り組みについて発表させていただきます。

水戸徳川家は、家康公の 11 男である頼房公を初代とする御三家の 1 つです。水戸黄門として知られる光圀公が 2 代、弘道館や偕楽園をつくったお殿様として有名な 9 代斉昭公、その実子の慶喜公、現当主は 15 代目で、現代まで脈々と続いています（図 1）。

2. 徳川ミュージアムについて

私ども徳川ミュージアムの活動について紹介をさせていただきます。当館にお越しになられた方はご存じかと思いますが、周辺が住宅地のためなぜこの場所にあるのかと聞かれることが多いです。実は当館の場所は、2 代目光圀公の頃より小さな建物を建てており、偕楽園よりもずっと長い歴史とゆかりがあります。徳川ミュージアムは 2011 年に内閣府所管の公益法人となり、博物館のほか、史料のデータの調査・公開、国指定史跡・名勝となった西山御殿跡（図 2）、同じく国指定史跡である水戸徳川家墓所（図 3）の公開・保存を行っております。さらに、光圀公が設けた牧場に始まる林業にも携わっております。常陸太田市にある杉やヒノキの林は、その一部が日本の伝統的な材料の確保、供給地の保存、それに関わる技術の継承を目的とした「文化庁ふるさと文化財の森」に選定されています。この森で産出された木材は、西山御殿の震災復旧工事、鹿島神宮の新拝殿の御扉にも使用され、このように単に修復を行うだけでなく、文化財を未来へ残すための活動も行っています。

3. 水戸徳川家と「歴史の道」

歴史の道と関連した徳川ミュージアムの取り組みをお話しさせていただきます（図 4）。まず、常陸国の主要な幹線である棚倉街道についてです。水戸から常陸太田市を通り、福島県までつながっていますが、光圀公の隠居所である西山御殿、水戸徳川家墓所が街道に沿うように点在しています。棚倉街道は、光圀公が水戸からの道中として利用され、また隠居後 10 年間過ごされた暮らしの中で日々歩かれた、言うなれば「黄門の道」です。この街道沿いには、今も田畑が広がっていて、特に棚倉街道から分岐して水戸徳川家墓所につながる参道の道中には多くの石碑が残っています。街道の雰囲気の色濃く残した道です。明日この道を歩くエクスカージョンにご参加される方には、普段車で通り抜けた、史跡を単独で訪れたりするだけでは分からない、歩くことでの発見やそれらの空間の広がりを感じていただけたらと思います。

こうした歴史の道ですが近年特に注目されており、古地図を持つ町の歩きや、それをテーマにした旅の番組・雑誌などを頻繁に見かけるようになりました。国土交通省のビジットジャパンの地方連携事

業として、昨年茨城県が取り組まれた「将軍の旅」と題した、徳川家歴史探訪ルート開拓事業のモデルコースがございます（図5）。「将軍徳川」をテーマに、茨城・栃木・東京の関連文化財などを巡る観光活用の一例です。本事業のターゲットは海外から観光に来られる方々ですが、これまでは1か所ずつ、「点」としてしか認識されてこなかった文化財を複合的に取り上げることで「面」としてとらえてもらう、さらには歴史認識の視野も広げてもらう試みとして日本人にとっても非常に興味深いものであり、我々もこの事業に協力しています。

続いて、光圀公の主な旅を詳しくご紹介させていただきます。諸国漫遊というイメージが非常に強い光圀公ですが、実際に出向かれた範囲というのは、南は鎌倉、東は銚子、北は勿来の関、西は日光東照宮まででした。こうしてみると、水戸街道や棚倉街道、鎌倉街道や日光街道も「黄門の道」であったことが分かります。特に日光街道は、天保14年（1843）に9代斉昭公が12代将軍家慶公の社参に伴って、一緒に日光へ参詣した際の詳細な記録が残っています（図6）。「日光從駕にっこうじゅうがず図」という史料で、多くの従者に囲まれた駕籠に乗っているのが斉昭公です。ほかにも家臣の服装や持ち物が詳細に描かれています。また、道中の名所や風景、その日の天候や宿場町の様子などが細かに描かれているのが特徴です。これらから街道は単に人やモノが通るだけでなく、職や流行も含め、道を通じて文化が広がっていたことがよく分かります。

一方、今度は海外に目を向けます。こちらは現在の韓国からやってきた外交使節団「朝鮮通信使」が天和2年（1682）に来日した際の行列の様子です（図7）。上には正使、下には外交文書が乗った神輿が描かれています。朝鮮通信使は江戸時代だけでも12回来ていて、光圀公も深く交流されたという記録が残っています。通信使は釜山から海路を渡ってまず対馬、壱岐、福岡、瀬戸内を渡って大阪、京都に入り、中山道を通して東海道という名だたる街道を通して江戸に入ります。一部は日光も訪ねていました。このように、歴史の道・街道は外交にも大きな役割を持っていたことが分かります。

なお、こうした史料は、博物館で保管・展示するだけではなく、主に東アジアや欧米の研究の第一人者を招いて、歴史の分野にとどまらず、思想史や科学分野など多角的・学際的に研究を行っており、その成果は、シンポジウムや海外での講演、データベースでの史料の公開を行って世界に発信しています。2019年には博物館の世界的組織ICOMの世界大会が京都で行われます。当財団では西山御殿という歴史的建造物を所有する博物館として、日本で唯一ICOMに加盟しており、学術的な裏付けを元に常陸太田市と連携して世界にPRしていきたいと考えています。

4. 史跡を活用した取り組み

今度は、史跡を活用した取り組みについてご紹介いたします。西山御殿は今年3月、光圀公が「大日本史」を編纂した記念碑的な場所として、そしてその往時の景観がよく残されているということが評価され、国史跡及び名勝に指定されました。今後はこれまで史跡として行ってきた保存整備だけではなく、光圀公が理想郷としてこの場所に求めた世界観や景観をより深く調査研究し、整備活用を行っていかうと考えています。明日は紅葉が見頃で、ご参加の皆様には御殿だけではなく、光圀公が愛でられた庭園もじっくりご覧いただきたいと思えます。また、西山御殿では光圀公が隠居後、一領民として米を育て、年貢を納めた御前田で食育プログラムを行っています。常陸太田市長にもご参加いただき、市内の幼稚園児の皆様にも田植えや稲刈りを体験してもらい、さらには収穫したお米をおにぎりにして味わいます（図8）。泥の感触や苗の手触り、稲穂の感触や一から育てたおにぎりを味わうといった、五感を使った体験プログラムとして力を注いでいます。さらに、地元の子供たちが積極的に文化財と触れあう機会をつくっています。写真は水戸徳川家墓所2代光圀公のお墓の前での様子です（図9）。墓所は東日本

大震災で被災し、現在も復旧工事の最中ですが、その中でも春・夏年 2 回の公開を行って参りました。毎回春の公開時には、常陸太田市内の全中学校 1 年生に見学に来ていただきます。しかし単に文化財を見学するだけではなく、文化財がそもそもどういうものか、また文化財ならではの保存整備の難しさ、工夫などを工事に関わった人から直接聞いたり、作業に使用している伝統的な工具に触れたりするなどの体験を行っています。水戸徳川家墓所のように、累代の当主が 1 か所に眠るといふ大名家の墓は類例がなく、こういった日本有数の文化財が地元にあること、それを知って体感してもらうことで郷土愛の醸成も図っています。こうした未来を築く子供たちへのアプローチが、歴史の道を未来につなぐ一躍を担えるものと考えています。

最後になりましたが、明日のエクスカッションは、歴史に思いを馳せていただくと同時に、現在から未来へつながる歴史の道を考えるきっかけとしていただけたら嬉しく思います。



家康公



光圀公



慶喜公

徳川家の歴史

1600	慶長 5 年	関ヶ原の戦い
1603	慶長 8 年	江戸に幕府をひらく
1629	寛永 6 年	小石川後樂園の作庭を開始
1657	明暦 3 年	徳川光圀『大日本史』の編纂に着手
1661	寛文元年	水戸徳川家墓所が瑞龍山に設けられる
1691	元禄 4 年	西山御殿に徳川光圀が隠居
1841	天保 12 年	水戸に藩校の弘道館開館
1842	天保 13 年	水戸に偕楽園開園
1867	慶応 3 年	パリ万博に徳川昭武派遣され、Prince Tokugawa の名とともにヨーロッパで注目を浴びる
1868	慶応 4 年	大政奉還、江戸が東京に改称
1884	明治 17 年	徳川諸家が華族となる
1906	明治 39 年	約 250 年を経て『大日本史』完成
1967	昭和 42 年	公益財団法人 徳川ミュージアム（旧水府明徳会）設立
1977	昭和 52 年	徳川ミュージアム（旧徳川博物館）開館

図 1 徳川家の歴史



図2 西山御殿跡（西山荘）



図3 水戸徳川家墓所

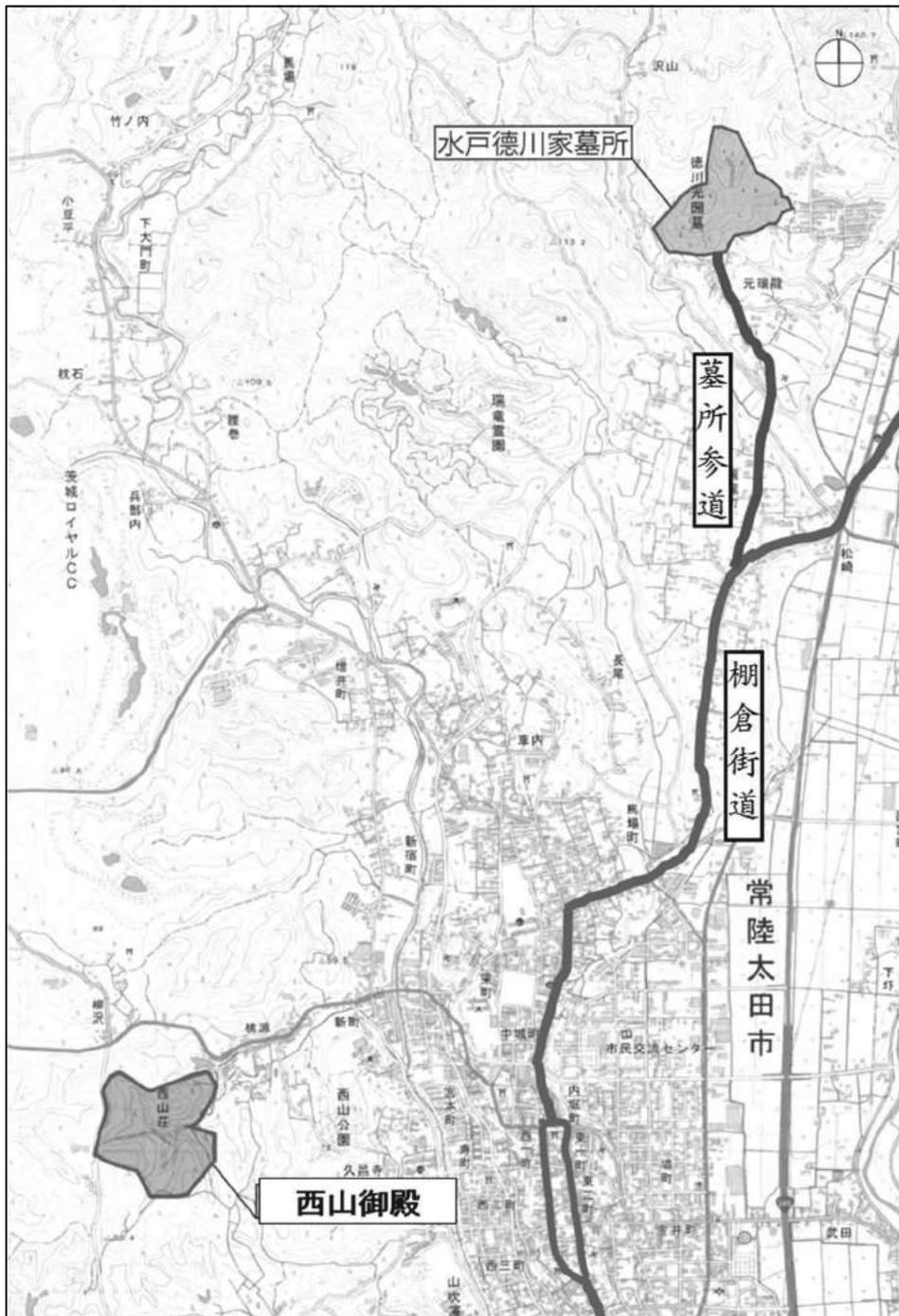


図4 常陸太田市の「黄門の道」



図5 徳川家歴史探訪ルート開拓事業のモデルコース「將軍の道」

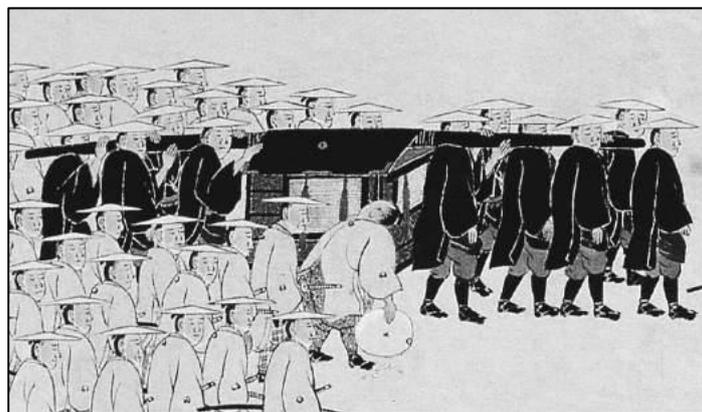


図6 「日光從駕図」に描かれた齊昭公の社参

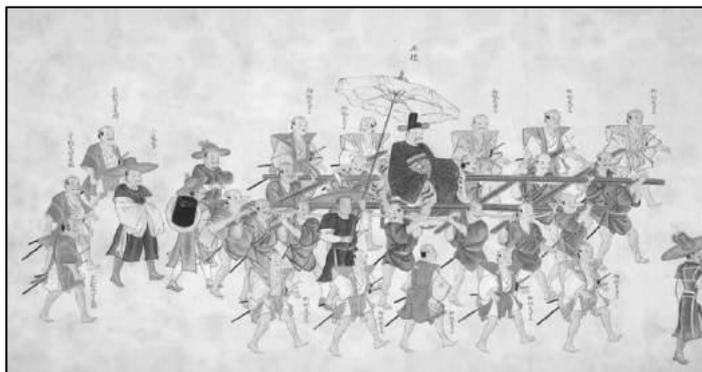


図7 「朝鮮人來聘図」に描かれた朝鮮通信使の様子



図8 御前田プログラムの様子



図9 水戸徳川家墓所における常陸太田市児童の文化財修復事業見学

講評



文化庁文化財部記念物課史跡部門 主任文化財調査官 佐藤 正知

ただいまご紹介にあずかりました、文化庁の佐藤でございます。

全国歴史の道会議茨城県大会が目指すところの第一は、身近な地域を見直すと共に、次世代を担う児童・生徒の育成という点にあります。水戸の五軒小学校と常陸太田の山田小学校の皆さん、それから県立牛久高等学校の皆さんの学習成果の発表は、私たちの心を強く打つものでありました。たかが道、されど道でありまして、特に歴史の道と呼ばれる道は地域の骨格を形成してきたものといって差し支えありません。道を辿っていくと、地域の交流の歴史が明らかになります。山田小学校の皆さんは、そのことを私たちに示してくれました。道のあり方を掘り下げていくと、地域の歴史が見えてきます。牛久高等学校の皆さんの実践は、そのことを如実に示してくれています。

「偕楽園記」や「弘道館記」に代表される、水戸徳川家の教育理念とその実践は、五軒小学校の皆さんの素読に示されたように、現代においてなお学ぶべき豊富な観点を秘めています。徳川ミュージアムは、現在文化庁の補助金を利用しながら、水戸徳川家が所蔵する史料の整理を進め、その成果の発信に努めておられます。本日の渡邊さんの報告は、その最新情報を歴史の道との関わりから私たちに提供してくれました。水戸市の関口さん、桜川市の宇留野さんは、歴史の道を活かして地域の歴史に触れ、これからの地域のあり方を模索する試みを重ねておられます。歴史の道は単なる過去の道ではなく、現在までの歴史の重なりを体現し、未来さえも映し出しているようです。記念講演をなされた小野寺先生は、江戸時代の絵図研究の第一人者であります。茨城県の歴史の道調査事業の委員長もお務めでした。道に多様な役割があると同時に、県民参加の調査ということも提言されました。道の機能の多様性は、地域の歴史の豊かさにも通ずるのではないかと感じたところであります。

歴史の道は、心と体の両方に関わっています。今日1日は、心あるいは頭に関わる座学が中心でした。明日はその一方の、体に関係して、実際に歩くことになります。小中学校の皆さんとその親御さんたちに申し上げます。心と体の両方をバランス良く鍛えていかねばなりません。歴史の道を辿ることは、そのことに合致しています。高等学校の皆さんに申し上げます。皆さんは、まもなく名実ともに社会の担い手になります。歴史の道に代表される文化財に是非関心を向け、地域の課題について考えていってください。本日会場にお越しの皆様申し上げます。本日壇上に立たれた皆さんの報告を聞かれ、世の中には面白いことがあるものだと感じられたに違いありません。文化財はとても面白いものであります。明日は二手に分かれて歩きます。一方が烈公斉昭、一方が義公光圀の道です。文化財は心にも体にも効く良い薬だということになれば幸いです。

今日の講評を一口でまとめてみます。それは、確かな可能性ということになるのではないのでしょうか。子供たち然り、茨城県然りです。

最後となりましたが、この全国歴史の道会議茨城県大会の準備と運営に当たられた、関係者の皆様に心からお礼を申し上げ、本日の講評とさせていただきます。本当にありがとうございました。

歴史の道ウォーキングの様子

2日目は、会議に参加した自治体職員や一般参加者を対象に、烈公コース（水戸市）及び義公コース（常陸太田市）と題して歴史の道ウォーキングを開催した。コースの内容は以下の通りである。

○烈公コース（水戸道中・城下町コース）

- 8:30 水戸駅南口集合
受付・資料配付
- 8:40 出発
- 9:00 吉田神社発
(備前堀、水戸城跡坂下門など)
- 10:30 旧弘道館見学
- 11:30 昼食（水戸市立三の丸小学校）
- 12:10 城下町を歩いて偕楽園へ
- 13:50 偕楽園着 休憩・見学
- 15:00 出発 千波湖畔P
- 15:20 水戸駅着・解散

○義公コースⅠ（棚倉道コース）

- 8:30 水戸駅南口集合
受付・資料配付
- 8:40 出発
- 9:20 道の駅着（トイレ休憩）
- 9:50 水戸徳川家墓所見学
- 12:00 太田城跡着（常陸太田市立太田小学校）・
昼食
- 13:10 梅津会館経由西山御殿跡（西山荘）着・
見学
- 14:20 常陸太田市立太田中学校駐車場出発
- 15:20 水戸駅着・解散

○義公コースⅡ（棚倉道コース）

- 10:00 常陸太田市立太田中学校駐車場集合
受付・資料配付
- 10:10 出発
- 10:20 水戸徳川家墓所着見学
- 12:30 太田城跡着（常陸太田市立太田小学校）・
昼食
- 13:40 梅津会館経由西山御殿跡（西山荘）着・
見学
- 14:50 常陸太田市立太田中学校駐車場・解散

当日は晴天に恵まれ、絶好のウォーキング日和となった。参加者は烈公コースが54名、義公コースⅠが48名、義公コースⅡが45名、計147名と、当初の定員に達する方に参加していただいた。

○烈公コース

烈公コースは全体を2班に分け、1班を茨城大学教育学部教授小野寺淳氏、2班をつくばみらい市立谷井田小学校教諭有賀由紀子氏及び県立鉾田第一高等学校教諭石井智子氏に、それぞれ解説していただいた。また、旧弘道館跡及び偕楽園の解説については、弘道館事務所小坪のり子学芸員のご協力を賜った。

当日は水戸駅南口に集合後、バスにて吉田神社（常陸三の宮）へ移動し、ウォーキングが始まった。かつて水戸の下町と呼ばれた町人地を歩きながら、初代藩主徳川頼房の命によってつくられた用水路

「備前堀」や水戸道中の起点となった「銷魂橋」，台地部の上町に入り，水戸城跡の「坂下門」（復元）や「薬医門」を経て，日本遺産に認定されている藩校「弘道館」を見学した。隣接する水戸三の丸小学校を会場に昼食休憩の後，上町や現在の地形から見える水戸城堀跡の痕跡を見て歩いた。普段気がつかないわずかな痕跡から紡ぎ出される江戸時代の城下町の様子は新鮮であり，参加者は熱心に解説に聞き入っていた。最後に，日本遺産認定の庭園「偕楽園」を散策し，園内の木々や千波湖の眺めなど，かつて人々が楽しんだ風景に思いを馳せた。



○義公コース

義公コースは，水戸駅集合のⅠと，常陸太田市で現地集合するⅡの2班に分け，それぞれ常陸太田市教育委員会文化課西野保氏及び山口憲一氏が解説を担当した。また，水戸徳川家墓所の解説については，徳川ミュージアム徳川眞木館長及び渡邊光恵学芸員のご協力を賜った。

当日はまず，バス移動により水戸徳川家墓所を見学した。水戸藩代々の藩主が眠る，普段公開されていない貴重な史跡を見ることができるとあって，参加者は解説を聞きながら熱心に見入っていた。次に，西山御殿跡を目指してウォーキングをスタートし，途中，棚倉道と瑞龍山への分岐を示した「瑞龍山道標」や，佐竹氏の重臣である小野崎氏発祥の地である「小野崎城跡」を見学した。かつて佐竹氏の本城であった鯨ヶ丘台地上の「太田城跡」（現常陸太田市立太田小学校）にて昼食休憩の後，旧常陸太田市役所として豪勢な石造りの威容をもつ「梅津会館」（現常陸太田市郷土資料館）を見学した。折しも，当日は「茨城県北芸術祭」の最終日であり，参加者はドレスアップされた外観や館内イベントも楽しんだ。最後に，徳川光圀公が余生を過ごした国指定史跡及び名勝西山御殿跡（西山荘）を見学した。かつて光

閑公も愛でたであろう、木々の紅葉で華やかに彩られた庭園を楽しんだ。



2016年(平成28年)11月20日 日曜日

茨城新聞

古道の活用考える

水戸で 大会 活動報告や専門家講演



全国歴史の道会議県大会で「二孝女物語」の寸劇を披露する常陸太田市立山田小の児童＝水戸市千波町

人や文化の交流の舞台となってきた古道「歴史の道」の保護や活用法を考える「第13回全国歴史の道会議県大会」が19日、水戸市千波町の県民文化センターで開幕した。全国各地の歴史愛好家や関係者など約400人が参加し、歴史の道を生かした郷土愛を育む活動報告や専門家の講演などを通して、地域の歴史や文化を見詰め直した。

「歴史の道」は、古道を「もたらため、文化庁が主歩いて文化財に触れて地域 唱。同会議は1990年かの歴史文化への理解を深めら2年に1回、全国各地で

実施されている。

初日は、歴史の道と文化

遺産を生かした水戸市のまちづくりの取り組みのほか、県立牛久高のフィールドワークを通じた地域の歴史学習など、県内各地の活動が報告された。

水戸市立五軒小の児童は、借楽園を開設した水戸藩9代藩主・徳川斉昭直筆の碑文「借楽園記」の暗唱を披露。常陸太田市立山田小の5・6年生は同市に伝

わる約200年前の親孝行姉妹の笑話「二孝女物語」の寸劇を発表し、大きな拍手を受けた。

茨城大の小野寺淳教授は「江戸時代の道はどのように使われたのか」をテーマに講演、古道の歴史的意義や今昔の変遷などについて理解を深めた。

開会式で、小野寺俊真教育長は「歴史の道の視点から茨城の魅力を感じ取ってほしい」と述べた。

最終日の20日は、日本遺産に認定された旧弘道館や徳川光圀公ゆかりの西山荘など、水戸、常陸太田両市の2コースを巡るウォーキング大会が開かれる。

(朝倉洋)

(2016. 11. 20 茨城新聞)

全国歴史の道会議 開催地一覧

回数	開催期日	開催県	開催テーマ	共催市町村など
1	平成2年10月22～24日	山形県	出羽仙台街道ほか	八幡町, 酒田市, 鶴岡市, 羽黒町, 新庄市, 最上町, 尾花沢市, 天童市, 山形市, 南陽市, 川西町, 高畠町, 米沢市
2	平成4年6月4～5日	長野県	中山道 (和田宿・馬籠峠・妻籠宿ほか)	上田市, 南木曾町, 和田村
3	平成6年9月7～9日	和歌山県	熊野街道 (大辺路・中辺路)	
4	平成8年11月6～8日	岐阜県	中山道	中津川市, 恵那市, 瑞浪市, 御嵩町, 美濃加茂市
5	平成10年9月10～11日	宮城県	奥の細道 (出羽街道中山越・陸奥上街道)	
6	平成12年10月19～20日	山口県	萩往還	萩市, 旭村, 山口市, 防府市
7	平成14年11月21～22日	静岡県	箱根街道, 新居関跡ほか	静岡市, 三島市, 岡部町, 金谷町, 新居町
8	平成16年11月11～12日	熊本県	豊前街道, 菊川水運ほか	山鹿市
9	平成19年5月17～18日	三重県	熊野街道(伊勢路), 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」	大紀町, 紀北町, 尾鷲市, 熊野市, 御浜町, 紀宝町, 東紀州観光まちづくり公社
10	平成21年5月28～29日	新潟県	松本街道, 相川往還	糸魚川市
11	平成23年9月29～30日	鳥取県	「歴史の道を活かす」 智頭往来, 奥大山古道, 若桜鉄道	智頭町
12	平成25年10月19～20日	徳島県	「遍路道を活かした地域の連携」 阿波遍路道	阿南市, 勝浦町
13	平成28年11月19～20日	茨城県	「歴史の道を活かした郷土愛の醸成」 水戸道中・水戸城下町、 棚倉道	水戸市, 常陸太田市

第13回全国歴史の道会議茨城県大会
水戸道中・水戸城下町，棚倉道
～歴史の道を活かした郷土愛の醸成～
大会報告書

2017年3月15日 発行

編集・発行：第13回全国歴史の道会議茨城県大会実行委員会

印刷・製本：佐藤印刷株式会社